あなたをまつ

sunny

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたをまつ

【Ｎコード】
Ｎ７６８２Ｆ

【作者名】
＊＊ｓｕｎｎｙ＊＊

【あらすじ】
ｓｕｎｎｙは既婚者・・離婚成立まで、後ちょっと。ネットで出逢ったバツイチ彼と、くっついたり離れたりしながらの遠距離婚外恋愛。お互い障害だらけの２人の・・ちょっぴり切ない秘密の恋愛物語（＾ω＾）・。＋・（´∀｀＊）・＋。

＊モノローグ＊

ｓｕｎｎｙは、既婚者
配偶者は5歳年上、サラリーマン・・
ｓｕｎｎｙ自身は、特別な職務に就いている、キャリアウーマン！

配偶者とは、両親の薦めで、結婚したんだよ
結婚して、2人の子どもができて・・
家事・育児・お仕事・・ずっと、頑張ってきたんだよ

結婚から7年目のこと・・
ｓｕｎｎｙは、子宮癌になってしまったの
それは、それは、辛かった闘病生活だった

それを機に配偶者は、ｓｕｎｎｙに、指一本・・　触れてくれなくなった
悲しかったな・・
もう・・　ｓｕｎｎｙは、女じゃないんだって思った

でも、ｓｕｎｎｙは負けなかったよ
教育に情熱を燃やし・・
向上心を持って、キャリアアップしていくことで、気を紛らわせていったよ

もう、男なんて頼らない・・

ｓｕｎｎｙ自身が男になりきって、負けないで生きてやるって！

いろいろ、話し合って・・
子ども達が、高校を卒業したら、離婚することに決まったんだ
あともう少し・・　毎日、指折り数えてた

そんな頃・・　心の隙間から、いろんな出来事が起こったよ
そんな、ｓｕｎｎｙの「秘密のお話」・・

序章（1）ネットの世界へ

ｓｕｎｎｙは、１日中ネットを酷使するお仕事・・
そして、出張も多かった。
だから、家に帰ってまでＰＣ開くことは、決してしなかった。
なんだか、お仕事の延長のようで・・
嫌だった。

毎日、仕事・出張・子ども達の教育で、疲れきってた。

ｓｕｎｎｙの癒しは、毎晩飲む、ほんの少しのアルコール・・
そして、子ども達の成長・・
ｓｕｎｎｙの自慢の子だった。

配偶者とは、目も合わさず、毎日生活していた。
１ｍ以内、決して近づかない・・
必要以外の、会話はしない・・
もちろん、夜の営みもない・・
最初は、寂しかったけど、慣れてしまった。
そのうち・・
だんだんと、嫌いになってしまった。
いつの間にか、離婚を真剣に、考えるようになってた。

そう、ｓｕｎｎｙ自身には、生活力もあるし、夢もあったから・・
なんとかなるって、思った。

子ども達が、義務教育を終えた頃・・
まずｓｕｎｎｙ自身が、子離れしないとって、思っていた。
そして、子ども達にも、親離れしてもらわないと・・

子ども達の自立・・
そして、ｓｕｎｎｙ自身の自立。
それが、ｓｕｎｎｙの最初の目標となった。

でも、何か、ひとつやり終えたような・・
心にぽっかり、穴ができた。
寂しかった・・

そうやって、一人の時間ができると・・
だんだんと、眠れない日が続いていった。
そんなある夜、ＰＣを開いてみた。
ネットは２４時間営業！
一晩中、キラキラ輝く、繁華街のようだ・・
そして・・
ｓｕｎｎｙは、どんどんネットの世界に入っていった。

序章（2）ブログ開設

そんな時、ＯＬの中で、流行っていたのがブログ・・

なんでも、ＯＬの６割近くが、ブログ開設の経験ありと、ＮＨＫの特集で知った。
でも、その中でも、続ける事のできる人は、たった１割程度・・
忙しかったり、継続させることが、できないのだ。

ｓｕｎｎｙも、やってみようかな・・

決算が終わり、監査も終わって、落ち着いた頃・・
とうとう、ｓｕｎｎｙも、ブログを持った。
話題があっても、なくても、毎日更新するのが、目標・・
日記代わりにしようって、思ってた。

ｓｕｎｎｙのブログ・・
いつの間にか、ファンが、どんどん増えていった。
レスの数も、半端じゃなかった。
あっという間に、ランキングに登場し、人気ブログの仲間入りをしていった・・

そのぶん、嫌がらせや、言い寄られることも、多かった。

その中の一人に、ｓｕｎｎｙの彼もいた・・
正直、顔も知らない人に、「逢いたい」とか「好きだ」と言われるのは、怖かった。
気色悪かった・・

そのうち、それにも、だんだん、慣れてきてしまう・・
感覚が、麻痺してきたのだ。
ネットの中に、自分の居場所を、作り出してしまっていた。
ブログのために、早起きをし、夜遅くまで、起きているようになった。

激しい頭痛・耳鳴り・吐き気・食欲不振が始まり・・
人の目を見て、話せなくなった。

でも・・
仕事さえ、ちゃんとしてればいいさ・・
その時は、そう思ってた。

リアルから遠ざかり、バーチャルなネットの世界が、
ｓｕｎｎｙにとって、暖かく感じられる居場所と、化してしまっていた。

自ら入り込んでしまった、暗い出口のない、トンネル・・
そんな時、ｓｕｎｎｙに、優しく接してくれる人が、現れた。

序章（3）初めての浮気

風のように、ｓｕｎｎｙのブログに、現れた人・・

どこの誰だか、わからないけど、ｓｕｎｎｙのブログストーカーのように

毎日々、やってきては、レスしていった。

レスの数も、半端な数ではなく・・

ｓｕｎｎｙが、ひとつ記事をあげると、その人のレスでいっぱい・・

まるで、公開メッセンジャー状態。

ｓｕｎｎｙが泣くと、レスの中で、大好きな曲を、歌ってくれたり・・

いつもブログを開くと、その人が、待っていたかのように現れる。

そして、公開メッセンジャーが始まる・・

他のｓｕｎｎｙファンさん達は、どう思っていたのだろう？

「○○さんに、ストーカーされてるんじゃない？」

「ここはみんなの書き込みの場所なのに、いつも2人のレスばかりで書きにくいよ。」

たくさんの、ｓｕｎｎｙファンさん達に、迷惑をかけた。

だけど、ｓｕｎｎｙの癒しだった。

毎日、ブログを開くとやってくる「風のような人」

しばらくして・・
生まれて初めて、顔も知らない人に、個人情報を教えた・・
ＰＣアド⇒携帯アド⇒携帯番号
あっという間だった。

7月7日、七夕の日に、初めて、その人の声を聞いた・・
ドキドキした・・
ｓｕｎｎｙは、久しぶりに、女の子の声でしゃべってた。

それから、約1ヵ月後・・
お互いの中間地点にある、真夏のテーマパークで逢った。
そして、一夜を共にした。

ｓｕｎｎｙ自身・・１０年以上ぶりの事だったから、出血した。
処女に返ってた。
でも、ｓｕｎｎｙに、女としての喜びを、思い出させてくれた。
嬉しかった。

その2ヵ月後、ｓｕｎｎｙは、その人の住む近くまで、逢いにいった。
そして、女としての喜びを、また感じた・・

でも、距離がありすぎて・・
お互いに既婚者同士だったし、本気になる前に、終止符を打った。

あめ玉のような、甘い恋・・

そして、ｓｕｎｎｙのブログから、風のように去っていった。

序章（4）同窓会

そんな頃、中学校の同窓会があった・・
ｓｕｎｎｙは、１度も出席したことがなかった。
だって、毎日の家庭と仕事に、追われていたから・・

ｓｕｎｎｙは、普段から仕事で、出張することが多くなっていた・・
もう子ども達は、自分のことがちゃんとできる年齢に、達していた。
今回は出席できるかな？

久しぶりに逢う、旧友達・・
みんな変わってない！
そう思った。

会場は、円卓がいくつも並べてあり、クラス別に、座席も決まっていた。
隣は、中学3年の時に、告白されたことのあった男の子『Ｔ君』。
ちょっと、ドキドキした。

ｓｕｎｎｙは愛煙家・・
でも、久しぶりの同窓会だったし、我慢して持参してなかった。
Ｔ君のタバコを見ると、ｓｕｎｎｙと同じ銘柄だった。
「わ～珍しい！Ｔ君もコレ吸ってるんだ・・ｓｕｎｎｙに１本くれない？」

ｓｕｎｎｙのその一言から、会話が始まった。

Ｔ君は、メーカー最大手のサラリーマン。
そして、独身・・

「カッコイイのにね、なんで今まで一人なの？」

「いや、転勤が多いから、今まで出逢いがなかったんだ・・」

２次会　３次会・・
ずっと２人で仲良く、手を絡ませあいながら、飲んだ。

帰り際・・

「あの明るかったｓｕｎｎｙ、どこへ行っちゃったの？
悩みでもあるの？」

そっと抱き寄せられ、キスされた。

その後、飲酒運転になるからと・・
彼の車で、一夜を過ごした。
スヤスヤと、子どものように眠るｓｕｎｎｙを、横でＴ君は、ずっと見つめていたらしい。

一線は越えなかった。

「これからも、友達でいたいから・・」

お互いにそう言いあって、超えなかった。

でも、帰宅すると　ｓｕｎｎｙの、お気に入りのブレスレットが、なくなっていた・・

序章（5）下心

ブレスレット・・
探しても探しても、見つからない。
唯一、メアド交換した、男友達に、連絡してみた。
その友達とは、最後のお店まで、一緒にいたから・・

同窓会会場、二次会、三次会のお店など、全て聞いてくれた。
やっぱりない・・
その友達にT君と朝まで一緒だったことを告げた。

「じゃ、Tになんとか連絡して、車に落ちてないか、聞いてやるよ。」

それから数日後、知らない電話番号から、携帯に着信があった。
T君だった・・

「俺も探してみたけど、やっぱりないみたい。
ゴメンネ・・
今夜、食事でもどう?」

「うん、ありがとう・・いいわよ。」

そう答えて、会社帰り、食事へいった。

ｓｕｎｎｙの話・・仕事のこと、家庭のこと、ずっと黙って聞いてくれた。

それから、２人で、夜景を観にいった。
そして・・再び、キス。

「ずっと、好きだった・・」

そう言われた・・

数日後、今度は、プライベートで、飲みに誘われた。
２人だけは、なんとなく気がひけたので、プチ同窓会として・・
男女４人で、飲んだ。

お開きになって、２人きりになったとき・・

「実はあの夜、ｓｕｎｎｙが車で寝ている間に、俺が外して持ってたんだ。」

そう言って・・
ブレスレットを、ポケットから出してきて、ｓｕｎｎｙの手にはめてくれた。

その夜、２人は無言で、ホテル街へと歩いていた。
そして・・
優しく優しくｓｕｎｎｙは、抱かれてしまった。

序章（6）恋するｓｕｎｎｙ

『恋』という時は・・下に心と書く

ｓｕｎｎｙの生活は、Ｔ君のおかげで、ガラリと変わった。
毎日、朝昼夜・・電話がかかってくる・・

「おはよう。身体の調子はどう？少しは食べられた？」

そう・・
ｓｕｎｎｙは、鬱症状がひどくなり、毎日、頭痛、耳鳴り、食欲減退に悩まされていた。
Ｔ君は、ｓｕｎｎｙの、『ひまわり』のような存在になった。

お互いに、完全週休２日制だったこともあり・・
土曜日は、毎週デートした。
地元なのに、堂々と手をつないで・・

食べられないｓｕｎｎｙに、食事を摂れるようにと、いろんなお店に、連れていってくれた。
少ししか食べられなくても、Ｔ君が、残りを全て平らげてくれる。
食べる大切さを、教えてくれた。

その後は、必ず、Ｔ君に抱かれた・・
毎週、毎週・・　抱かれ続けた。

「どうして、既婚者であるｓｕｎｎｙに、こんなに優しくしてくれ

るの？」

「ｓｕｎｎｙが、笑ってくれるだけでいい・・それだけが、俺の望みなんだ。」

そのうち・・　鬱症状も、落ち着いてきた。
Ｔ君のおかげだった・・

クリスマスには、プラチナのアンクレットをもらった。
誕生日には、ブランドのバッグをもらった。
次のクリスマスには、ダイヤの指輪をもらった。

毎週土曜日は、Ｔ君とデート・・
今日は、どこへいくのかな？
２年間・・　ずっと、Ｔ君と過ごした。

でも、「愛」を感じることは、なかった・・

序章（7）恋の終わりは突然に

また、新しい年を迎えて・・
だんだんと、逢う回数が減ってきた。

「明日は、用事があるんだ」

「来週は家のことで・・」

ｓｕｎｎｙは、初めて、寂しさを覚えた。
なぜ？
今までと違う・・　何かが違う・・

たまに、逢ったとしても、いつも、帰宅時間を気にしているＴ君。
ｓｕｎｎｙは、まだまだ一緒にいたいのに・・
そして、言葉少なげにさっさと、ｓｅｘをするだけ・・

思い切って、聞いてみた。

「最近のＴ君・・変だよ。どうしたの？」

「そう？いつもと、変わらないと思うけど・・」

なかなか、本音を話してくれなかった。
でも、ある日、とうとう話してくれた・・

「最近、母親のアルツハイマーの症状が進んできて、
父親が毎日看てるんだけど・・

早く俺に、結婚してくれと言ってるんだ。
俺も真面目に、結婚を考えないと・・
こんな事、してられないなって思ってきてて。
この先、ｓｕｎｎｙと結婚できたとしても、俺は、子どもが欲しい。」

そっか・・
ｓｕｎｎｙは、子どもが産めない身体・・
最近、この恋の終わりが、近づいてきてたなって、なんとなく感じてた。
でもｓｕｎｎｙは、この恋が、やっと、愛に変わろうとしてたのに・・
遅かった。

ｓｕｎｎｙは、やっぱり、普通の女性ではないのかなと思った。
既婚者だし、子どもは産めないし、恋はできても・・
もう、愛すること、愛されることは、許されないのかなとも思った。

好きな人の子どもを、産めない身体・・
自分の運命を呪った。
これから先、人を愛することは、きっとないだろう。

涙が流れて、止まらなかった。

＊プロローグ＊

「恋」と言う字は、下に心・・　下心

「愛」と言う字は、真ん中に心・・　真心

恋は「恋する」とは表現しても、「恋される」とは表現しないので、恋は一方的なもの。

愛は「愛する」・「愛される」どちらも表現できるので、愛は双方的なもの。

まだ、本当の「愛」を知らなかったｓｕｎｎｙ。

そして「愛」は仏教語で、異性や物をむさぼり求めること、十二因縁のひとつ。

この因縁の始まりが、彼だった・・

彼の名は・・　ｋｅｉ

ｋｅｉは、ｓｕｎｎｙの１０歳上・・

バツイチ、独身、容姿端麗・・

だけど、優しい目をしていたが、とても暗い目をすることもあった。

とても、辛い過去のある人だったのだ。

クリスマス　２５日に、息子さんが、自宅で自殺という悲しい過去・・
彼が第一発見者で、自分の腕の中で死んでいったという。
死んだ後の家族が、一生忘れることのできない辛さを、身をもって知り・・
生きることの大切さを、ｓｕｎｎｙに教えてくれた人。

ｓｕｎｎｙがブログを始めた頃・・
鬱つながりで、知り合った。
当時のｋｅｉのブログは、もの悲しい記事が、多かったけど・・
考えらさせられる事ばかりで、ｓｕｎｎｙは、魅力を感じていた。

ｋｅｉとｓｕｎｎｙ

因縁尽（いんねんづく）・・　逃れられない条件。
逢う前から、そんな糸で結ばれていた・・

人を愛すること・・
素直に愛すること・・
ちょっと、普通とは違う・・

ｓｕｎｎｙの「無条件の愛」が始まった。

第1章（1）ネットストーカー

ｓｕｎｎｙとｋｅｉは、ブログで知り合った。

ｓｕｎｎｙが、ブログを始めたばかりのころ・・
『一期一会』
何十万、いや、何百万分の１の可能性の、出逢いである。

その頃のｋｅｉは、息子さんの誕生月で、傷ついていた。
ｓｕｎｎｙは、仕事のこと・家庭のことで、悩んでいた。
そんな、鬱同士の出逢いだった。

ｓｕｎｎｙが、ブログで泣くと・・
ｋｅｉは、心温まる、優しいレスをしてくれた。
だけど、その頃のｓｕｎｎｙは、全てから拒絶し始めていた。
自分のことだけで、精一杯だったから・・

そんなｓｕｎｎｙを、心配してくれるのは、ありがたかったけど・・
本心は、ｋｅｉが怖かったからだ。
酔ってる時の、レスが異常だったのだ・・

「今度、ｓｕｎｎｙの住む町に、行ってもいいかい？」

「好きなんだ。」

「ｓｕｎｎｙに逢いたい。」

「ｓｕｎｎｙを抱きたい。」

ｋｅｉは、酔っ払う度に、内緒で、こんなレスをしてきた・・

それも、どんどん、エスカレートしていった。

翌日になると、ｋｅｉは、昨日は酔っ払ってて、レスしたこともさえ、覚えてないと言う。

そして、謝ってくる・・

そんなレスは困ると、何度も注意したが、２ヶ月以上続いた。

仕方ないので、ｓｕｎｎｙが、無視し続けると、

「私は、あなたのストーカーなのでしょうか？

迷惑なら、警察へでも、何処へでも、訴えていただいて結構です。

逃げも隠れもしません。

あなたに、逢ってみたいだけなんです。」

と、ｋｅｉの本名、住所、電話番号、メアドが貼られてた。

本当に怖かった・・

とうとう、堪忍袋の緒が切れた！

ｓｕｎｎｙのブログに、ｋｅｉが出入できないような措置をとった。

それから半年間、ｋｅｉは、ｓｕｎｎｙの前に現れなかった。

第1章（2）再び・・

ｋｅｉとｓｕｎｎｙが、ブログの行き来をやめて、半年・・
突然、ｋｅｉが現れた。

「ｓｕｎｎｙ　ひさしぶり・・
僕は、なんとか今年も、あの辛い日を乗り越えたよ。
そして、僕は、仏の道の弟子になったんだ。」

そう、内緒でレスがあった。
あ・・そうか、あの日・・クリスマスが過ぎていた。
きっと、辛かったんだろうな・・
正直、忘れていたことに、ｓｕｎｎｙは、申し訳なく思った・・

それから、ｓｕｎｎｙのブログへ、ちょくちょく、来るようになった。
ｋｅｉは、鬱を脱していたようにみえた。

【いま死にたいとか、辛いとか思ってるとしたら
それは、幻です。
（中略）
でもね、死んで何かが生まれる？
生まれるのはね、残された人の苦痛だよ。
考えたことある？
確かに辛いだろうと思うよ。

そこから逃げたら『負け』だよ。

自殺したら、地獄だよ。

人間はね、いづれ死ぬんだよ。
悩みは人によって様々だとは思うけど、
空を見てごらんよ、自分がどんなに小さいか
悩みがどんなにつまらないかが、分かるよ。

悩むのは、あなたが優しいからだよ。
（中略）
もしも、、もしもね、
自殺を諦めて生きてくれたら
心からオイラは
喜ぶよ、あなたが生きることで
たった一人かもしれないけど
ここに喜ぶオイラがいますよ。】

仏の道に、助けられたｋｅｉ・・
その言葉に、ｓｕｎｎｙは『因縁』を感じていた。
なぜなら、ｓｕｎｎｙは　お寺にゆかりのある子・・
しかも、たくさんある宗派の中、ｋｅｉの宗派と、ｓｕｎｎｙの宗派が、
全く同じだったからだ。

この時、初めて『縁（えにし）』『血』を、感じた。

ｋｅｉとのつながりを確信し、この先、きっとなにかあるような気がしていた。

第1章（3）リストラ

そんな頃・・
ｓｕｎｎｙの長年勤めてきた企業の営業所が、支店統合することになった。
他支店へ転勤、もしくは、解雇の選択を迫られた・・
女性であり、家庭のあるｓｕｎｎｙは、単身赴任はできない・・
ようするに、リストラである。

４月、担当営業所は閉鎖され、ｓｕｎｎｙは、リストラされた。

再就職に向けて、求職活動が始まった。
なかなか、納得のできる企業は、見つからない。

実は、ｓｕｎｎｙの夢は、カフェオーナーになること・・
コツコツ、資金を貯めてきてた。
いっそ、もう起業してしまおうか・・
いろいろ考えた。
でも、まだ資金が足りない、修業もしていない、サービス業の経験もない・・
結局、いろんな企業を転々とし、現在の企業、同職種に落ち着いた。

ｓｕｎｎｙのリストラ事件から、１年弱・・
今度は、ｋｅｉがリストラされると、書き込みをしてきた。

そんな、ｋｅｉのことが、気になって・・
初めて、ｓｕｎｎｙの個人情報を、教えた。
ブログで知り合って、２年が経過していた・・

３月も終ろうとしている頃、初めて、ｋｅｉから、電話がかかってきた。
落ち着きのある、とても魅力的な声だった。
リストラの話をしたあと・・
ｋｅｉは、ｓｕｎｎｙの家庭事情を、聞いてくれた。

「ｓｕｎｎｙを、ひとり養うくらいの甲斐性はある。
こっちに来ないか？」

逢ったこともないのに、そう、言ってくれた。

「だけど、ｋｅｉは、今からリストラされるんでしょ？」

笑い合った・・

それから、毎日のように、こんなメールをするようになった・・

ｋｅｉ　【　おはよう・・いってきます　】
ｓｕｎｎｙ　【　おはよ～！いってらっしゃい　】
ｋｅｉ　【　ただいま・・おやすみ　】
ｓｕｎｎｙ　【　おかえりなさい～！おやすみなさい　】

一人暮らしのｋｅｉが、これで癒されるのなら・・
そう思ってた。
ｓｕｎｎｙも、別居をし始めてたので、いつも１人で寂しかった。

毎日、ｋｅｉからのメールを待つようになっていった。

第1章（4）緊急入院

世の中は、ゴールデンウィークを、迎えようとしていた。
ｓｕｎｎｙは、急な腹痛で、緊急入院を強いられた。

盲腸？卵巣嚢腫？

そんな、疑いをかけられた。

たった1つ、残してあった女性の象徴、卵巣を取らなければいけないかも・・
ｓｕｎｎｙは、これで完全に、女性でなくなってしまう恐怖にかられた。
でも、検査していく中、「S字結腸憩室炎」とわかった。

安心した・・
絶食、安静、点滴で、2週間ほどで退院できる予定だった。

ｓｕｎｎｙは毎日、病院の個室から見える、窓の外を眺めてた・・
雲の流れを見つめていた。

ゴールデンウィーク・・
今年は、何処にもいけないな。
旅行好きな、ｓｕｎｎｙにとっては、辛かった・・

そんな中、毎日のように励ましてくれたのが、ｋｅｉ・・

ｋｅｉは、すでにリストラされてた。

「本当なら、ゴールデンウィークに、そっちへ遊びに行こうと思ってたんだ。
逢いたいと、思ってた。
ｓｕｎｎｙさえ嫌じゃなかったら、お見舞いに、行ってもいいかい？」

そう、言われた。
さずがに、初対面の人に、パジャマ姿、ましてや素顔を見られるのは、嫌だと思った。
でも、なぜか・・　ｋｅｉに、そばにいて欲しかった。
逢ったこともないのに、そばにいて欲しいと思ってた・・

「やっぱり、入院中は嫌・・
退院して、元気になってからがいいな。」

そう、返事した。

毎日、メールや電話で話した・・
そして、ｋｅｉの住む街や、旅行先での写真を、メールで添付してくれた。
ｓｕｎｎｙは、一緒に、旅行している気分になれた・・
ｋｅｉとｓｕｎｎｙ・・　どんどん、『心の距離』が、縮まっていくのがわかった。

ゴールデンウィークも明けたころ・・
予定より、少し長引いたけど、ｓｕｎｎｙは、退院することができた。

第2章（1）出逢い

ｓｕｎｎｙが、退院して落ち着いた頃・・
ｋｅｉから連絡があった。

「そっちへ行こうかと思うんだけど、いいかな？
いつなら逢えるかな？」

ｓｕｎｎｙは、予定表を見てみた。
そして、休みを探してみた・・
この日だ！

「ｓｕｎｎｙに予定を合わしてくれるのなら、いいよ。
この日はどう？」

即決だった・・
こちらでの、宿泊先を探してあげた。
ｓｕｎｎｙがよく利用する、ビジネスホテル・・

「予約完了したよ。」

そう、メールがきた。
よく考えると、明後日だ・・
なんだか、落ち着かない日が、過ぎていった。

当日、ｓｕｎｎｙは午前中で、仕事を切り上げ、ｋｅｉに電話してみた。

「今、どのあたり？」

ｋｅｉは、車で順調に、こちらへ向かっているようだった。
でも、よく考えると、待ち合わせ場所も、時間も決めてなかった・・
こちらへの到着時間を計算し、ｓｕｎｎｙもタクシーに乗って、出発した。
ｋｅｉの予約してある、ビジネスホテル、めがけて・・

すると、電話が、かかってきた。
ｋｅｉとｓｕｎｎｙは、少しでも早く逢えるように・・
ｓｕｎｎｙが電話やナビで、指示を出し合いながら、お互いの距離を、縮めていった。

「もうすぐ、逢えると思うから、車の名前と色、教えて・・」

街は、夕暮れ・・
とある、歩道橋の元、ｋｅｉの車が見えた！
ｓｕｎｎｙとｋｅｉは、出逢えた。
２年以上の時を経て・・
やっと、出逢えた。

第2章（2）優しい瞳

４車線の道路・・
歩道橋を昇って渡るのも、もどかしく・・
ｓｕｎｎｙは、反対車線のｋｅｉの車めがけて、走って道路を横切った。
息苦しさも、伴いながら、ドキドキして助手席のドアを開けた・・

「こんにちは・・」

それが、お互いの最初の挨拶だった。

助手席に乗り込み、見つめ合った・・
想像通り、いや、想像を超えた、ｋｅｉの優しい瞳・・
なんかの流行言葉ではないが、ビビビ！
ぴったりの言葉である。

「あのね・・実は、お願いがあるの。
家のガスの火、止めてきたか自信ないの・・」

その頃、ｓｕｎｎｙは、すでに別居していて・・
家を教えるのは、抵抗があったけど、どうしても気になるので、別宅へ急いでもらった。

「中には入れてくれないの？」

「男子禁制なんです。」

そう言って、一人で家に入って確認してきた。
ｓｕｎｎｙの心配をよそに、ガスはちゃんと、元栓まで閉めてあった。

それから、ｋｅｉの宿泊先である、ビジネスホテルへと向かった・・
チェックインの間、ｓｕｎｎｙはひとり、ロビーで待ってた。
ｋｅｉが荷物をおいて戻ってきたので、ｓｕｎｎｙお薦めの、オイスターｂａｒへいった。

「かんぱ～い！」

最初は、ビールで乾杯した。
生牡蠣を食しながら、どのワインが一番あうか・・
いろんな種類のグラスワインを、１杯だけオーダーし、二人で飲み比べあった。
ｓｕｎｎｙは、エグい赤ワインが好み・・ｋｅｉも同じだった・・

「気に入ったワインと、出逢えたら、ボトルで飲もう。」

これだと、思えたワインに出逢えたころには、二人とも相当飲んでいた。
ｋｅｉは、そのワインを、最後に2杯オーダーし、

「二人の今日の出逢いに、Ｋ・Ａ・Ｎ・Ｐ・Ａ・Ｉ」

そう言って、二人で、一気に飲み干した。
素敵なｋｅｉに、ｓｕｎｎｙは、とろけてしまいそうだった・・

もう少し食べないと・・と、今度は、ｓｕｎｎｙがお忍びで使う、居酒屋へ向かった。
ｓｕｎｎｙは、足から出血していた・・
履きなれていない、可愛い赤い靴・・
びっこをひきながら、ｋｅｉに寄り添って歩いた。

居酒屋の個室で、今度は、世界のチーズを食しながら、焼酎を飲んだ。
好みが似てるなって、お互いに笑い合った。
ｋｅｉがトイレに立った隙に、自分の足を見てみた・・
靴下に血がにじんで、真っ赤になってた。

「はい、これ・・」

ｋｅｉが、フロントで、絆創膏を貰ってきてくれていた。
ビックリした・・
靴擦れしてるなんて、言ってないのに・・

優しいｋｅｉ・・
居酒屋出た時には、手をつないでいた。
横断歩道で、突然キスされた・・
耳元で、ホテルの部屋番号、１０分後に来てほしいと囁かれた。

ｓｕｎｎｙは、コンビニで、お水や新聞を買い、時間をつぶし・・
ｋｅｉの待つ部屋へと、向かった。

第2章（3）初夜

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの部屋の、ドアの前に立った。

コンコン・・

ドアが開いた。

シングルの部屋だけど、このビジネスホテルのよさは、部屋が広いこと・・

ｓｕｎｎｙは、滑りこむように、部屋に入った。

部屋の入り口で、抱きしめられた・・

そして、キス・・

二人、もつれ合いながら、ベッドに移動し倒れこんだ。

ｋｅｉの身体から、とてもいい匂いがした・・

あっという間に、脱がし合い、お互い全裸になった。

「ｓｕｎｎｙ・・　ｓｕｎｎｙ・・」

「ｋｅｉ・・　ｋｅｉ・・」

ｋｅｉの手が、いろんなところに、伸びてくるたびに、ｓｕｎｎｙは、悲鳴に近い声を上げた。

こんなに感じてるのは、初めてかもしれない・・

「風呂、沸かしたんだ。一緒に入ろう・・」

そう、言われてバスタブまで、抱っこされていった。

ビジネスホテルの狭いお風呂の中で、激しく愛撫されるたびに、ｓｕｎｎｙは声を上げた。

「声が大きいよ・・ここ、シングルなんだから。」

そう言われ、口をふさがれ・・　ｓｕｎｎｙは余計に悶えた。
身体を拭くのも、もどかしく・・
またベッドで愛し合い、とうとう・・　ｋｅｉがｓｕｎｎｙを貫いた。
二人は、１つになった。
ｋｅｉは激しかった・・
痛いくらいに、激しかった・・
ｓｕｎｎｙは、絶叫し何度も何度も、頂点に達し・・　失神寸前だった。

「もう、やめて・・」

ｓｕｎｎｙは、何度も懇願したが、ｋｅｉは、やめてくれない。
少しの休憩をとりながらも、何度も、それを繰り返した。
ｓｕｎｎｙが、あまりに叫びすぎて・・
喉の渇きを訴えると、口移しで、水を飲ませてくれた。
そして、下の口には、口移しで、アルコールを飲まされた・・
燃えるように、熱い・・
初めての感覚、ｋｅｉに、しがみつき泣いて絶叫した。
どのくらい、経ったのだろう・・

「ｓｕｎｎｙ、愛してるよ。」

ｋｅｉが頂点に達した。
熱いものを、注がれた。
ｓｕｎｎｙは、素直にそれを、受け入れた。
しばらく、身体が動かなかった・・

「じゃ、帰るね。明日、朝一番に、また来るから・・」
そう言って、ｓｕｎｎｙが、服を着た。
「だめだ！まだ、帰らせない。」
と、脱がされ・・　激しく、愛撫された。
服を着る・・　脱がされる・・
それを、５～６回繰り返した頃・・
ｋｅｉが、やっと眠りについてくれた。

「明日、朝１番のバスに乗って、ここへ来るからね。
　おやすみなさい。」
メモを残して、ｓｕｎｎｙは部屋をあとにした。
時計を見ると、１時だった。
帰り道のタクシーの中・・　ｓｕｎｎｙの身体中から、ｋｅｉの匂いがしてた。

第2章（4）初めての朝

翌朝、ｓｕｎｎｙは始発のバスに乗って、ｋｅｉの待つ部屋へ向かった。
途中、スタバで朝食を買って・・
それから、電話してみた。

「おはよ・・
もうすぐ着くから、部屋に入れるようにしておいてね。」

「ＯＫ！」

ｓｕｎｎｙの身体は、昨夜のことが、まだ、さっきのことのように覚えてる・・
恥ずかしくて、下を向いて、ｋｅｉの待つ部屋へ急いだ。

部屋に入ると、ｋｅｉはシャワー中だった。
ベッドは乱れ、ペットボトルや空き缶が転がり、洋服は脱ぎ捨てられたまま・・
部屋中、乱れていたので、その間に片付け、お湯を沸かしておいた。

「おはよ・・」

「おはよう。ｓｕｎｎｙ・・」

ｋｅｉが、バスローブを着て、出てきた。
ベッドに横たわり、

「タバコ、水・・　あ、スープが飲みたいな。」

ｓｕｎｎｙは、かいがいしく、ｋｅｉの身の回りの世話をした。

「ｓｕｎｎｙ、昨夜のことなんだけど・・
僕たち、あの・・あの・・　そういうことに、なっちゃったんだよね？」

え？覚えてないのかな・・
何時間か前に、あんなに、激しく、熱く、愛し合ったことを・・

「知らない・・」

ｓｕｎｎｙはそう答えて、シャワールームに入った。
熱いシャワーを浴びて、バスタオルに身を包み、出てきた。

「うそだよ・・　ｓｕｎｎｙ、愛してる。」

「ｓｕｎｎｙも、ｋｅｉを愛してる。」

【愛してる】という言葉が、ｓｕｎｎｙの口から、スラリと出た。
ｓｕｎｎｙが、今まで、使ったことのない言葉・・
自分でもビックリした。

そして腕をつかまれ、ベッドに引き寄せられ、愛し合った。
昨夜とは違い、とても優しく、時には激しく、お互いに貪りあった。

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの口や手だけで、頂点に達して、悲鳴をあげ

てしまう・・
そして、ｋｅｉのものを、口に押し当てられ、悶絶する。
「ｓｕｎｎｙ、俺のずっと、待っていた女だ。愛してる・・」
そんな言葉を耳元で、何度も言われながら、またひとつになった。
ｓｕｎｎｙは、何度も頂点をむかえ、体液が溢れ出し、シーツに恥ずかしい染みを作った。
ｋｅｉは、強かった。
ｓｕｎｎｙが、失神寸前に、やっと果ててくれた・・

それから、ベッドの上で、朝食を摂り・・
食べあっこしたり、ふざけては、笑いあった。
ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの虜になった。

一緒に朝を迎えた?記念として、ｋｅｉが二人の記念写真を撮った。
素足だけ、並べて撮った・・
とても、変てこりんだけど、すごくエロくて綺麗な写真・・
ｓｕｎｎｙの、お気に入りの１枚となった。

第2章（5）初デート

チェックアウト後、ｋｅｉの車で出掛けた。
そう、ｓｕｎｎｙの住む街は・・有名な観光地である。

ｋｅｉの腰には、ムービーが吊り下げられ、手にはデジカメ・・
常に、ファインダーを覗く姿が、凛々しく見えた。
そして、腕には・・素敵な時計が、巻かれていた。

「その時計・・　素敵。　欲しいな・・」

ｓｕｎｎｙは、そう・・　せがんでみせた。

市場に行き、名物を食べながら、仲良く、手を繋いで歩いた。
公園や、観光物産館・・
いろんなところを、案内した。
金箔シールを買い、お互いの携帯に貼りあった。
二人の大好きな猫のシール・・
二人の携帯は、キラキラ光った。

最後の１枚を、ｋｅｉの車の助手席に、貼った。
『ｓｕｎｎｙ専用席』
ｋｅｉが笑った・・

ふと気が付くと、ｓｕｎｎｙに、ムービーのファインダーが、向けられてる・・

「やだ～！恥ずかしいじゃない・・」

「僕は、ｓｕｎｎｙの全てを見ちゃったから、恥ずかしがることはないさ。」

朝までの事を思い出し・・　急に、恥ずかしくなった。
楽しい時間は、あっという間に過ぎていった・・
ｓｕｎｎｙは、聞いた。

「今夜、一気に帰るの？それとも、途中の宿泊先は、決まってるの？」

ｋｅｉは、東北のとある街から、片道約５００ｋｍ、車を飛ばして来てくれてた。

「う～ん、決めてないんだ。もう1泊、しようかな・・
ｓｕｎｎｙは、ダメかい？」

翌日は、出勤しなければいけなかったので、断った。
本当は、一緒にいたかったけど・・
ネカフェで、ｋｅｉの宿泊先を探した。
ｋｅｉが、少しでも、帰路につけるように・・　ｓｕｎｎｙは、心を鬼にして選んだ。

そして、いよいよ、お別れの時間・・
ｓｕｎｎｙは、人目も憚らず、自分から、ｋｅｉに抱きつき、キスをした。

「ｋｅｉ・・　愛してる。」

「来月、一緒に旅行に行かないか？
また、逢ってくれるかい？
この時計は、その時にあげる。
それまで、毎日つけて、僕の匂いをしっかりと、つけておくよ・・
」

ｓｕｎｎｙは、こくんと、返事をした。
長い、長いキスをして、車を降りた・・

ｋｅｉの車が遠ざかっていく・・
ｓｕｎｎｙの身体は、まだ熱く、ｋｅｉの匂いがしてた。

第2章（6）愛の糸電話

【　子どもの事件から、僕には笑顔がなくなった。
これからは、ｓｕｎｎｙを思い、姿勢をよくして生きていく。
今度は、江戸に愛に恋！　】

あの出逢いから、ｋｅｉとｓｕｎｎｙは　離れられなくなった・・

そう・・ｋｅｉは元々、東京人。
東北でリストラされ、もう東北に居る必要が、なくなったのだ。
東北での家を処分し、東京の実母の住むマンションに、引越が決まった。
故郷に帰るのだ・・
きっと求職数も、東京のほうが、多いはずだ。

毎日、ボイスメッセンジャーで話した。
しかし、引越のために、ｋｅｉのネットが、使えなくなった・・
携帯で話せばいいのだけど、そのうち、お互いに、膨大な通話料金になっていった。
それでも、まだまだ話し足りなくて・・
すると、ｋｅｉから、携帯電話が送られてきた。
家族間無料通話を、利用したそうだ。
その携帯を、ｋｅｉは　『愛の糸電話』と名付けた・・

そのうち、引越も終わり・・

ｋｅｉは、都民になった。

ｓｕｎｎｙは、体調不良を理由に、会社を辞めた。
二人とも、無職・・
ｓｕｎｎｙは、次の就職先が、決まっていたのだが・・
ｋｅｉは、相変わらず、のんびりと構えていた。

朝から晩まで、ずっとメッセンジャーや、『愛の糸電話』で話してた。
それを見て、ｋｅｉの母君は、呆れていたらしい・・

毎日毎日が、ずっとｋｅｉ一色だった。
お互いに、支え愛・・　束縛しあう事が・・
ｋｅｉとｓｕｎｎｙの、最高の幸せだと思ってた。

第3章（1）June

時は6月・・
ｋｅｉが、突然堕ちた。
そう、自殺した息子さんの、『誕生日』が迫ってきたのだ。

いつもの、電話やメールは、無視された。
ｋｅｉは、全てから拒絶していた・・
ｓｕｎｎｙは、なるべく、そっとしておいた。

ｋｅｉからは、半狂乱になってみせたり、突然、泣いて電話してきたり・・

「倅のところへ逝きたい・・」

何度も、何度も、泣かれた。
ｓｕｎｎｙは、目が離せなかった・・
朝・昼・晩となく、恐怖にかられてるのだろう。
息子さんへの愛情の強さ、失った悲しみは、それほど強いのかと・・
ｓｕｎｎｙは、そう思って、支え続けた。
すぐにでも、ｋｅｉのそばに行ってあげたかった。

誕生日を超えても、気持ちが治まるまでの数日間、大変だった・・

「すまなかった。
でも、この事だけは、これからも無条件に理解してほしい・・

そして、ｓｕｎｎｙに、受け入れて欲しい。」

ｓｕｎｎｙは、覚悟した。
ｋｅｉを、誰よりも、愛していたから・・
今のｋｅｉには、ｓｕｎｎｙしかいないだと、信じていたから・・
そして、宗教的にもわかってあげられると、思ったから・・

そんな事もあり、旅行先は関西となった。
ｋｅｉの親友が眠る地、息子さんが眠る地・・
名付けて、『仏の心に触れる旅』
二人は、２泊３日で、計画した。
もちろん、楽しむための日も取り入れた・・

「もうすぐ逢えるね・・」

二人の『希望の光』となったのは、いうまでもない。

第3章（2）ＬＯＶＥ　ＡＦＦＡＩＲ～大阪～

いよいよ・・二人の待ちに待った、旅行の日になった。

ＬＯＶＥ　ＡＦＦＡＩＲ　～秘密のデート～

ｋｅｉは、東京から、ひかりで・・
ｓｕｎｎｙは、北陸から、サンダーバードで・・
午前１１時半・・新大阪駅で、再会した。

デパ地下で、赤ワインを買い、イタリアンカフェで、軽い昼食をとった。
この日は、天王寺へ、お墓参りへ行った。
ｋｅｉの親友であり、兄貴分であり、ワイン仲間に、逢うために・・
２年前に急逝し、ｋｅｉは、まだ信じられないと言っていた。

ちょっと迷いながらも、目的地に到着・・
お墓の掃除をし、赤ワインをお供えした。
読経するｋｅｉ・・
ｓｕｎｎｙも、後ろで一緒に読経した。
同じ宗派なので、つい、口元から出てくるのは、当たり前のことだった。
ふと、気が付くと、ｋｅｉが泣いていた・・

「兄ちゃん・・　なんで、何も言わず、先に逝っちまったんだ。」

お墓に縋りつき、泣いていた。

「ｓｕｎｎｙも、お参りしてやってくれ・・」

ｓｕｎｎｙも、墓前で、手を合わせた。
ｋｅｉの親友、そして兄貴分・・　どんな素敵な人だったのだろう。
逢ってみたかったな・・
そして、一緒に、ワインを飲んでみたかったなと思った。

それから、気分を取り直し『新世界』へ向かった・・
通天閣横の串カツ屋さんで、自分達の再会を悦び、乾杯した。
ｋｅｉに笑顔が、戻ってきた・・
梅田へ移動し、夕方まで、ショットｂａｒで飲んだ。

今夜の宿泊先は、リゾートホテル・・
舞子まで、行かなければいけないのに、ｋｅｉは、すでに泥酔気味。
二人よろけながら、支え合いながら、快速電車に乗った。

「約束していたものだよ・・
　昨日まで、ずっと使ってた。」

ｓｕｎｎｙの左腕に、あの時計をはめてくれた。
それは、まるでエンゲージリングのような儀式に思えた・・
車中は混雑していたけど、二人は長いキスをした。

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの肩にもたれながら・・
涙を隠すために、車窓を眺めてた。

第3章（3）LOVE　AFFAIR～舞子～

ｓｕｎｎｙとｋｅｉは、予定時刻を少し過ぎて、
舞子最大のリゾートホテルに、チェックインした。
オーシャンビュー・・　目前には、明石海峡大橋！
想像をはるかに上回る、素敵な部屋に、ｓｕｎｎｙは感激した。

１日歩き回っていたので、すぐに、二人はシャワーを浴びた。
ｋｅｉが、全身を洗ってくれた・・

「今夜は、思いっきり・・叫んでもいいからね。
でも、その前に、カラオケに行こう・・
予約してあるんだ。」

ｓｕｎｎｙの身体は、すでに火がついていた。
それを堪えて、二人はカラオケルームへと急いだ・・

カラオケルームも、特別室を予約してあった。
二人には勿体無いくらい広く・・
壁一面の大きな窓から、明石海峡大橋のライトアップが見えた。

ｓｕｎｎｙは、歌は上手ではないので、ちょっと恥ずかしかった。
ｋｅｉは、歌がとてもうまいのだ。
二人の大好きな曲、『ＴＳＵＮＡＭＩ』を、膝に抱っこしながら、
歌ってくれた・・
最後は・・
フランクシナトラの　『Ｍｙ　Ｗａｙ』

ｋｅｉは、歌詞も見ずに、ｓｕｎｎｙの目を、見つめながら歌ってくれた。
とろけてしまいそうだった・・

部屋に帰り、軽くシャワーをして、愛し合った。
熱く、激しく・・そして優しく・・

「今夜は、思いっきり抱いてやる。
ｓｕｎｎｙ・・　愛してるよ。」

その夜、ｓｕｎｎｙは生まれて初めて痙攣し、失神した・・
そして・・そのまま、ｋｅｉの腕の中で朝まで眠った。

翌朝、早めに朝食を摂り・・
チェックアウトの時間ギリギリまで、また、お互い貪りあった。
何度も何度も、ＴＳＵＮＡＭＩのように押し寄せる頂点・・
二人は、思う存分楽しんだ。

「話があるんだ・・真面目に聞いてくれないか？
ｓｕｎｎｙにお願いがある。
この先、僕にもしものことがあったら、ｓｕｎｎｙの手で・・
この僕を、葬ってくれないか・・」

ｋｅｉの突然の申し入れに、驚いた。
そっか・・
ｋｅｉの信じる宗派に従って、いつか、息子さんと同じ世界に逝き

たいんだなと、思った。
ｓｕｎｎｙには、可能である。
全く同じ、宗派・・そしてお寺の子だからだ。
即答は、できなかったけど・・　頷いた。

「ありがとう。」

【僕は、ｓｕｎｎｙの過去を好きになったんじゃない。
これから、二人の明るい未来を作ろうね・・】

旅行前に、そんなメールを貰っていた。
その時は感じていなかったけど・・
ｓｕｎｎｙは、『結婚』という二文字を、意識し始めた。

第3章（4）LOVE　AFFAIR～淡路島・四国～

次の日、明石でレンタカーを借りた。
その時に、ｋｅｉの免許証を見て、驚いた・・
普通から大型特殊、バイクなど・・　全て取得してあったのだ。
しかも、2種まで・・

「すごい免許証だね。」

「いや、ｓｕｎｎｙだってすごいさ。ゴールドじゃないか・・」

ナビ付のビッツを借り、ＥＴＣカードを差込み、走り出した。
明石海峡大橋を渡り、淡路島に上陸した。
観覧車に乗りたがる、子どもっぽいｓｕｎｎｙに、ｋｅｉは、望みを叶えてくれた。
眼下に広がる景色に、感動し・・
一番高いところに達した時、二人はキスをした。
キス写真を撮ったのは、いうまでもない。
ｋｅｉの持つムービーは、ずっと、ｓｕｎｎｙに向けられていた・・

明石焼きを食べ、次はどこへ行こうかと話し合った。

「あのね、四国に、ブログで仲良くしている人がいるの・・
　でも、高松だから・・　やっぱり遠いよね。」

「いや、いいさ・・可能なら、逢わせてあげる。
　いつまた、こうやって、ここまで来られるか、分からないだろう？
　こういうチャンスは、逃したらダメだ・・　一期一会は、大切に

するべきだ・・
　勇気を出して、電話してみたら？」
そして、即、逢いにいくことに決まった・・
ｓｕｎｎｙは、友達に電話をしてみた。

淡路島を、飛ぶように縦断・・
高松の待ち合わせ場所まで、１５０ｋｍ。
ｋｅｉは、元プロドライバー・・　安心して、横に乗っていられた。
その間・・たくさん、話した。
いよいよ、高松ＩＣを降り・・　目的地に近づいてきた。
友達が、手を振って待っていてくれた・・

「今日は、京都まで帰らなければいけないから、滞在時間は３０分だよ。」
ｋｅｉに言われて・・車を降りた。

友達とは、初対面だったが・・　抱き合って喜び、最初の挨拶を交わした。
二人で、ｋｅｉに感謝した・・
それから、ｋｅｉ、ｓｕｎｎｙ、お友達でお茶をした。
ｓｕｎｎｙが、中座したとき、友達がｋｅｉにお礼を言うと・・

「僕は、ｓｕｎｎｙの笑顔を、みたいだけさ。
　今度来るときは、僕たちは、一緒になってるかもしれない。
　それまで、ｓｕｎｎｙと仲良くしてやってくれな・・」

後で聞いたのだが、ｋｅｉは友達に、話したらしい。
たった３０分だったけど、とても、有意義な時間を過ごせた。

高松を後にし、また明石に向けて、高速を走らせた。
鳴門海峡大橋を渡るとき、『うずしお』が見えた・・
そのタイミングのよさに、二人で感動した。

感動は、いつも二人一緒・・
幸せも、分け合いっこ・・

明石に帰り、レンタカーを返したときには、夕暮れだった・・
新快速に乗り、京都までの車中、ｋｅｉは、ずっとｓｕｎｎｙの肩にもたれて寝てた。
昼間、大人だな～と感じた横顔とは対照的に、子どものような寝顔・・
ｓｕｎｎｙは、ずっと手を握って、さすっててあげた。

今日は、ｓｕｎｎｙのために、ありがとう・・
３００ｋｍ以上もの運転、お疲れさま・・
ｓｕｎｎｙは、感謝の気持ちでいっぱいで、涙がほほを伝った。

第3章（5）ＬＯＶＥ　ＡＦＦＡＩＲ～京都１～

少し暗くなってきた、午後７時過ぎ・・
ｓｕｎｎｙとｋｅｉは、京都駅に、降り立った。
ｋｅｉの顔が、だんだんと、険しくなっていくのがわかった。

予約先である、ビジネスホテルにチェックイン・・
ｋｅｉは、初めて不平を言った。

「部屋が狭い・・タバコ臭い。」

部屋を、変えてもらった・・
口数も減り、ｓｕｎｎｙは横で、ｋｅｉの顔色ばかり、伺っていた。

ｓｕｎｎｙは、京都へ仕事で何度も来ていたから、夜の京都は、詳しかった。
夜ごはんを食べにいく店、和ダイニングｂａｒも、頭の中に決めていた・・

「今夜は、飲むつもりはない。
　身を綺麗にして、息子に逢いに行きたいんだ・・」

予定を変更し、ビジネスホテル近くの、中華を食べに行った。
言葉少なげに、食事を摂るｋｅｉ・・

ｋｅｉの携帯電話が、鳴った。

とても長い電話で、母君と、喧嘩しているようだった・・
ｓｕｎｎｙは、食事を済ませ、代金を支払い、先に店を出た。

【先にホテルへ帰ってるよ。部屋番号は、○○○だからね・・】

メモを残して、一人でホテルへ帰った。
初めて、ｋｅｉを、遠くに感じた・・
部屋に帰り、シャワーを浴び、布団の中で泣いていた。

１時間ほどして、ｋｅｉが、部屋に帰ってきた。
そして、長電話してたことを、謝った。
ｓｕｎｎｙは、怒って、知らん顔した・・
ｋｅｉは、シャワーを浴び、布団の中に入ってきた。
そして、話し始めた・・

「ｓｕｎｎｙ・・　言っておきたいことがある。
さっきは、食事中に、本当にすまなかった。
実は、旅行前日、母親と大喧嘩していたんだ。
あの人は、僕を産んだだけで、５歳の時に家を出て行った人だ。
気も合わないし、どんなことでも、干渉してくるから、好きじゃないんだ。

それから、ｓｕｎｎｙ・・　お願いがある。
僕の前では、必ず、１歩でいいから、引いてくれ。
ｓｕｎｎｙは、頭がいいし、よく気が付くし、気も利く・・
今までの、僕の今までの女の中では、その点では最高の女だ。
だから、１００点満点あげる。
だけどね、ちょっと、男勝りというか・・
男性と、肩を並べて、一線で仕事してきたせいも、あるかもしれ

ないけど・・
その点は嫌なんだ。
僕は、どちらかというと、けなげな子が・・　好きなんだ。」
ｓｕｎｎｙは、どちらかと言うと、見た目は、女の子・女の子している・・
お洒落に、人一倍気を遣い、可愛くみせるように心掛けてきた。
だけど、負けず嫌いだった。
ずっと、男なんてと、思って生きてきたから・・

ｋｅｉには、見抜かれていた・・
でも、嬉しくて・・涙が溢れて、止まらなかった。
今まで、ｓｕｎｎｙをもてはやし、誉めてくれる人は、多々いたが・・
こうして、忠言してくれる人は、初めてだったからだ。

ｋｅｉ好みの女になろう

そう、ｓｕｎｎｙは思った。
その夜は、浄化の意味も含めて・・
愛の確認は、なにひとつしなかった。

第3章（6）ＬＯＶＥ　ＡＦＦＡＩＲ～京都２～

翌日、早起きした二人は、ホテルのビッフェで、朝食を済ませ・・
早めに、チェックアウトした。

京都駅のコインロッカーに、荷物を預け・・
二人仲良く、手を繋ぎ、歩いて『お東さん』へと向かった。
朝から、とても暑い日だった。
ｋｅｉは、道端のカラーコーンをかぶってみせたり・・
道化師ては、ｓｕｎｎｙを笑わせてくれた。
でも、ｋｅｉの気持ちが、痛いほどわかっていた・・
『お東さん』が見えてきた・・

ｋｅｉは、身支度をし始めた。
金属類は、ご法度なので、全て外し始めた。
ネックレス、時計、サングラス、デジカメ、ムービー・・
ｓｕｎｎｙが、代わりに身につけた。
肩衣をかぶり、手には数珠、経本・・
神妙な面持ちになった。
二人は門の前で、一礼し、中へと入っていった・・

本殿は、改装工事中だった。
ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの3歩ほど、後ろを歩き、ついていった。
本堂で、お参りするｋｅｉ・・
ｓｕｎｎｙは、遠くからずっと眺めていた。
二人はずっと、無言だった。

それから、高僧の講演があるというので、二人で聞きにいった。
ふと、横を見ると・・
あろうことか、ｋｅｉは、軽く鼾をかいて寝ていた。
ここまで来て、やっと気が抜けて、疲れちゃったのかな・・
講演も終わり、エレベーターの中で、ｋｅｉがｓｕｎｎｙに、腰を押し付けてきた。

「朝立ちしちゃったよ。」

二人は、やっと笑顔になった。
子どもがやるスタンプラリーを、ｓｕｎｎｙは、こっそりやっていた。
詰所に行き、ラリーの結果を出し、二人は鉛筆を貰った。

【差異を認める世界の発見　バラバラでいっしょ】

そう、書かれていた。

それから、タクシーに乗り、祖廟へ行った。
ここへは、ｋｅｉの息子さんの、『のどぼとけ』が納骨されている。
親鸞上人のふところに抱かれて、眠っているのである・・

「ｓｕｎｎｙも、一緒にお参りしてくれないか？
ちゃんと、紹介したい・・」

ｓｕｎｎｙは、迷ったが頷いた。
ピンクの数珠を買い、準備した・・
心を清めて、お参りした。

「今のお父さんの、苦しみがわかりますか？
もうこれ以上、苦しめさせないであげて下さい・・」

そう、ｓｕｎｎｙは思いながら、手を合わせた。

ｋｅｉは、清々しい顔をしていた。
肩衣を外し、ｓｕｎｎｙは、代わりに身につけていた金属類を、全て返した。

暑い暑い日・・
二人は、汗を噴出しながら、この旅での、１番の目的を果たせた。

第3章（7）ＬＯＶＥ　ＡＦＦＡＩＲ～喧嘩～

二人は、タクシーで、京都駅まで帰ってきた・・
ｋｅｉは、帰りの新幹線切符を買った。
ｓｕｎｎｙは、このまま大阪の伯母の家で、週末まで過ごす予定だった。

お別れの時間まで、あと2時間ちょっと・・
二人で、駅ビルの中の、お好み焼屋さんに入った。
最後の時間・・
お好み焼や、すじ煮をおつまみに、二人で飲んだ。
最初は、向かい合わせに座ってたけど・・
ｓｕｎｎｙは、少しでもそばに居たくて、ｋｅｉの横に座った。
そして、二人で写真を撮ったり、キスをしたりしていた・・
店内は混んでいたが、恥ずかしくはなかった。

次第に時間が迫ってきて・・
ｋｅｉの顔が、険しくなってきた。
その顔を見て、ｓｕｎｎｙは、ついに泣き出してしまった・・
笑おうとしても、大粒の涙がこぼれた。

「新幹線乗り場まで、１０分はみておかないと・・
３０分前だよ、そろそろ行こうよ。時間ないよ・・」
ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの手を掴み、席を立った。
「時間なんて、どうでもいいんだ。

もう少し、京都に・・　息子のそばにいたい・・」

ｋｅｉが突然怒って、ｓｕｎｎｙの手を、はねのけた。

「乗り遅れちゃうよ・・」

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの荷物を持ち、支払いを済ませ、店を出た。
そして、新幹線乗り場に、向かった・・
ｋｅｉが追いかけてきた。

「俺の１歩でもいいから、後ろを歩いてくれと、話したばかりじゃないか！」

人目を憚らず、大声で怒鳴られた。
一瞬、人だかりの輪ができた・・

「恥ずかしいから、やめて・・」

ｓｕｎｎｙは、泣きながら言った。

「ｓｕｎｎｙは、昨日、俺がお願いしたことも、できない女なのか！」

ｋｅｉは、だいぶ飲んでいた。
二人の喧嘩に、駅員さんが、駆けつけてきた・・
もう、新幹線発車時刻まで、あと５分を切っていた。

「早く行って・・　ホント乗り遅れちゃう・・」

ｓｕｎｎｙは、泣きながら、ｋｅｉの背中を押した。

ｋｅｉは、改札を通り、人混みへ消えていった・・

もう、おしまいだ・・
嫌われた・・

新快速、市バス、大阪の伯母宅への道のり・・
ｓｕｎｎｙは、迷子になった子どものように、しゃくり上げて泣いた。

第3章（8）LOVE　AFFAIR～仲直り～

叔母の家に着いても、ｓｕｎｎｙはずっと泣いていた。

「なにか、あったの？」

ｓｕｎｎｙは、小さい頃から、両親の愛情をあんまり感じないで育った。
いつも、姉ばかり・・　そう思いながら、成長した。
両親に好かれようと、いつも、両親の言うことを聞いた。
だから、両親の勧めるままに、結婚もしたのだ。
ｓｕｎｎｙには、そんなトラウマがあり、両親の元に帰ることは、あまりなかった。
意地もあった・・

叔母は、そんなｓｕｎｎｙを、小さい頃から、必要以上に、可愛がってくれた。
今でもｓｕｎｎｙは、叔母には、なんでも相談するし、信頼もしている・・

「ううん・・　大丈夫。
　お友達とちょっと、喧嘩しちゃっただけ・・」

そう言って、お風呂に入った。
お風呂の中で、声をあげて泣いた・・
泣いても、泣いても、涙は止まらなかった。
いっそ、叔母に、相談してみようか・・

叔母も離婚・再婚経験があるから、ｓｕｎｎｙの気持ちを、わかってくれるかもしれない。

そう思った矢先に、『愛の糸電話』が鳴った！

「ｓｕｎｎｙ、僕だ！　今、東京駅だよ。
叔母さんは、どう？
新幹線の中、ずっと、携帯を切って、寝てたんだ・・
疲れたかい？
３日間、いろいろありがとう・・　愛してるよ。」

ビックリした。
さっき・・　しかも、喧嘩別れしてから、４時間と経ってない。
信じられなかった。

嫌われてない。
ただただ、嬉しかった・・

「ｓｕｎｎｙ、愛してるよ。」

「私も、愛してる。」

そう言って、電話を切った。

京都駅でのことは、水に流そう・・　そう思った。

ｋｅｉ好みの女になろう

無条件の愛を、誓ったのだ。

【僕たちは、地球の果てにいても・・・　いつも繋がってるよ】

その夜、そんなメールがきて・・・　ｓｕｎｎｙは、眠りについた。

第４章（１）荒れた生活

関西から帰り、しばらくすると・・
ｋｅｉが荒れた。
母親との生活が、ストレスとなり、引き金になったらしい。

「家は地獄だ・・
母親と、食事も、生活スタイルも、全然合わない。
家には、居たくない。
毎日、気がおかしくなりそうだ・・」

来る日も来る日も、夕方になると、明るいうちから、飲みに出掛けるようになった。
そして、グデングデンに酔って、朝方帰宅する・・
そんな生活が、続いた。

夜中に、鳴り響く『愛の糸電話』・・
ｓｕｎｎｙが出ないと、留守電に、怒鳴り声が入ってた。

「ｓｕｎｎｙ、どうして出ないんだ！
逢えなくて寂しいから、こうやって、飲み歩いてるんだ！
電話に出ろ！」

怖かった。
ｓｕｎｎｙは、怯えた・・
毎晩、９時になると『愛の糸電話』の電源を、切るようになった。
すると、ｓｕｎｎｙの携帯に、電話がかかってくるようになった・・

「ｓｕｎｎｙ！
寂しいんだ・・　いい加減にしないと、本当に着信拒否にしてしまうぞ！」

毎晩、朝方まで飲んでいるので、昼過ぎまで寝ていることが多くなった。
必然的に、求職活動もしていない・・

ｓｕｎｎｙは心配だった。
いったいお金は、どうしてるのだろうか・・
毎晩、湯水のように使って・・
だけど、落ち着くまで、放っておくしかなかった。
この先、ｋｅｉに、困ったことが、起こりませんように・・
ｓｕｎｎｙは、耐えていた。

そのうち、ｓｕｎｎｙの心配が、本当になってしまった。
事件が起きた。

第４章（２）事件

ある日、早朝に『愛の糸電話』が鳴った。

「ｓｕｎｎｙ、助けてくれ・・
今、何処にいるかわからないんだ。
事件に巻き込まれたらしい・・
バッテリーが、今にも切れそうなんだ。」

「え、どうしたの？
何処にいるの？怪我してるの？」

「痛い・・助けてくれ・・」

ツーツーツー・・
電話が切れた。
バッテリーが切れたようで、かけ直しても、つながらなかった。

ｓｕｎｎｙは、慌てた。
一体何処に、連絡すればいいのだろう・・
頭を働かせ、考えた。
そうだ！ｋｅｉの所轄警察署に、相談してみよう・・
ｓｕｎｎｙの言うことを、信じてくれるだろうか？
しかも、北陸から東京のことだ。
そして、関係を聞かれるだろう・・
でも、ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの命の方が大切だと思い、所轄警察署

に電話した。
ｋｅｉの個人情報、そして、現在の情報を、全て話した。
確認のため、ｓｕｎｎｙの個人情報も、話さなければならなかった。
ドキドキした・・
本当に事件性があるか、イタズラではないかの確認のために、
警察から、折り返し電話がかかってきた。

「８時になったら、ｋｅｉさんのお宅に確認へ行きます。」

そう言って、確認は終わった。
そうだ！　ｋｅｉの母君に、連絡をしなくては・・
ｓｕｎｎｙは、連絡を取り、事情を話した。

「ｓｕｎｎｙさんね、ｋｅｉから、いつも聞いてるわ。
そんなことになってるの？怖いわ・・
あなたの連絡先を、教えてちょうだい。」

それから、１分１秒が何時間にも感じられた。
ｋｅｉは、生きてるのだろうか・・
身も凍る思いだった。

１０時過ぎ、『愛の糸電話』が鳴った！

「今、帰ってきた・・すまない。」

「バカ！」

涙が、溢れてきた・・
よかった、生きていた。

事情は、ｋｅｉが話してくれるまで、今は、聞かないでおこうと思った。
それから、所轄警察署から電話があり、ｋｅｉの母君から電話があった。
ｓｕｎｎｙは、やっと安堵した・・

でも・・　ちょっと、度が過ぎてると思った。
ｋｅｉのことが、わからなくなった・・

第４章（３）謹慎処分

事件の翌日、ｋｅｉが、事情を話してくれた。

事件前夜、一人でいつものように飲んでいると・・
何軒目かで、怪しい誘いが、あったらしい。
そこまでは、覚えていたらしいのだが・・
気がついたら、雑居ビルのソファーで、寝かされてたそうだ。
それで、慌ててｓｕｎｎｙに電話をしたと、言っていた。
財布を見ると、１万円だけ残されて、あとは全て抜き取られていた。
２０万円近く、盗られてしまったらしい。
尾てい骨を、骨折したらしく・・　痛いと言っていた。
きっと、殴られたり、蹴られたりしたのだろう。
ｋｅｉは、馬鹿なことをしたと、反省していた。

「これからは、寂しくても、飲みに行かない。
　ｓｕｎｎｙ、許してくれ・・
　お願いだ・・　逢いたいんだ。」

そう、せがまれた。

「身体は、本当に大丈夫なの？
　でも、今は逢いたくない・・　ｋｅｉが怖くなった。
　しばらく考えさせて。」

ｓｕｎｎｙは、心を鬼にして、言った・・
本当は心配で、すぐにでも逢いたかった。

「ｓｕｎｎｙのことを、本当に愛してるのなら・・
今から2週間、謹慎して。
しばらく、お酒もやめて・・
求職活動も、ちゃんとやって・・　お願い。
そしたら、考えてあげてもいいよ・・
その代わり、お母さんに対する愚痴でも、何でも、聞いてあげるから・・」

ｋｅｉは、了承してくれた。

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉ自身に、今の荒れた生活を、見直して欲しかった。
ｋｅｉの、謹慎生活が始まった。

第４章（４）品行方正

愛するｋｅｉが、ｓｕｎｎｙの元に、戻ってきた。
朝は、ｓｕｎｎｙが、６時半に『愛の糸電話』で、モーニングコールをする。

「ｋｅｉ、　おはよ～！」

「おはよう、ｓｕｎｎｙ！」

お互い、それぞれに朝食を摂り、それから、ボイスメッセンジャーで話した。
ｋｅｉのパソコンは、ビデオカメラも搭載していたので・・
ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの顔を見て、話すことができた。
ｋｅｉは、寂しくなると、ｓｕｎｎｙのムービーを見て、気を紛らわせたという。

そこまでしなくても、いいと思ったが・・
ｋｅｉは、何処かへ出掛ける時も、逐一メールで、知らせてくれた。

【今から、ハローワークへ行って来る】

【ただいま～！今、帰ってきたよ】

手紙も届いた。

【暑中お見舞い申し上げます
暑くなってきたね・・

身体に気をつけてね
いつの日か、ｓｕｎｎｙと一緒に暮らせたら・・そう思う

愛してるよ

品行方正代表　ｋｅｉ

より】

嬉しかった。
そんな感じで、ｓｕｎｎｙには、ｋｅｉが真面目に、謹慎していたように見えた。
ハローワークへ通い、求職活動も、頑張っているようだった。
本当に、生活の見直しをしているのだと、思った。

謹慎から、１０日くらい経った頃・・
ｓｕｎｎｙは、そろそろかなと、思った。

「実はね、　ｓｕｎｎｙは、就職が決まってるの。
今月中頃から、また、お勤めするの・・
それまでに、逢いたいな・・」

ｋｅｉが、喜んだのは、いうまでもない・・

「そっちまで、逢いに行くよ・・
温泉でも行こう！」

また、逢える・・
お互いに毎日、指折り数えてた・・

第４章（５）おねだり

二人は、綿密に旅行を計画した・・
ボイスメッセンジャーをしながら、ネットを見て、最初に温泉宿を決めた。
たった一泊二日の時間を、いかに有意義に過ごそうかと・・
来る日も来る日も、話し合った。
そして、お互いに、希望を言い合った。

「ｋｅｉには、朝一番早い電車で、逢いにきて欲しい。」

「ｓｕｎｎｙの車で、ドライブがしたい。」

「ペアルックが、着たい。」

「お昼は、ｓｕｎｎｙのお弁当が、食べたい。」

などなど・・
お弁当の中身まで、話し合った。
メインは、夏野菜を使った、南プロヴァンス料理『ラタトゥイユ』に決まった・・
ｋｅｉは、調理師の免許を持っていた。
いくら、ｓｕｎｎｙの得意料理のひとつでも、何度も練習して当日に備えた。

「ｓｕｎｎｙ、いつも本当にありがとう。
僕からのお土産は、何がいい？
何でも好きなもの、買ってあげるよ・・」

ｋｅｉが、そう言った。

「チタンリングが欲しい・・
もし可能なら、ｋｅｉと、ペアがいい。」

その頃、ｓｕｎｎｙは、原因不明の、酷い頭痛に、悩まされていた。
チタンは、血流をよくすると聞いていたので、おねだりしてみたのだ。

「わかった！探してみるよ。
ｓｕｎｎｙの薬指の号数を、教えてくれ・・」

ｋｅｉは、東京中、チタン専門店を探してくれた。
でも、出発までに、見つけることはできなかった・・

「ごめん・・　そっちで、素敵な指輪を、買ってあげる。
二人で一緒に、選ぼうね・・」

ｋｅｉのその気持ちだけで、嬉しかった。

だんだん逢える日が、近づいてきた・・
しかし、気持ちと裏腹に、ｓｕｎｎｙの体調は、最悪になっていた。

第４章（６）真夏の日本海

温泉旅行当日・・
ｋｅｉが、予定通り１０時半に、到着した。
ちゃんと、お揃いのＴシャツを着て・・
電車から降りてくるなり、ホームで、強く抱きしめられた・・

「ｓｕｎｎｙ、やっと逢えた・・
この日を、ずっと待ち望んでいた。」

終点駅で、ホームは蒸し暑く、混雑していたが、二人はキスをした。
長い長いキス・・　熱い・・　息苦しい・・

「ｋｅｉ・・　暑いよ。」

そう言って、ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉから離れた。
改札を出て、二人仲良く、ｓｕｎｎｙの車に乗り込んだ・・
助手席には、ｋｅｉ専用の『ネコの金箔シール』を、事前に貼っておいた・・
ｋｅｉは、それを見て、喜んだ。

「久しぶりに日本海がみたいでしょ？
素敵なスポットがあるから、そこでお弁当、食べよっか・・」

今日はｓｕｎｎｙが、運転手。
二人の大好きな、サザンのＣＤを聞きながら、車を走らせた。
曲に合わせて、歌うｋｅｉ・・
ｋｅｉは、ダッシュボードにムービーを置き・・

二人の姿、会話を、全部収録していた。
日本海が見えてきた・・

「ヒャッホ～！」

ｋｅｉが、嬉しそうに、はしゃいだ。
とある、道の駅に車を停めて・・
お弁当を持って、二人仲良く、手をつないで歩いた。

「あの橋・・　愛の橋、ラブリッジっていうんだよ。
　恋人同士で通ると、願いが叶うんだって・・」

二人は、橋の真ん中で、長い誓いのキスをした。
誰が見てたって、構わない・・
真夏の太陽だけでも、暑いのに、二人はもっと熱い。

サービスエリアで、『ｓｕｎｎｙ弁当』を、開いた。

ｋｅｉのリクエスト・・　ラタトゥユ
ｋｅｉが大好きな・・　若鶏のから揚げ、ヒレカツ、出汁巻き卵、
ｓｕｎｎｙ特製梅干、ご飯

調理師のｋｅｉの口には、合わないかもしれない・・
ｓｕｎｎｙは、恥ずかしかった。

「美味しい！
　料理は愛情だよ・・
　どれも、ｓｕｎｎｙの愛が、いっぱい詰まってる。
　ありがとう・・　僕は幸せだ。」

そう言って、平らげてくれた。
お世辞だとしても、ｓｕｎｎｙは、嬉しかった・・
また、機会があったら、何か作ってあげたいなって、思った。
一緒になれたら、毎日、作ってあげられるのにな・・

『ｓｕｎｎｙ弁当』を食べた後、ｓｕｎｎｙは、こっそり薬を飲んだ。
顔を歪めるほどの、頭痛がしていた・・
ｋｅｉには決して、気付かれたくなかった。

「今度は、僕に運転させて。」

ｋｅｉが、そう言ってくれて、ホッとした。
それから、日本海に沿って、目的地である温泉宿に向かって、南下して行った。
ｓｕｎｎｙは、助手席で、頭痛をこらえていた・・

第４章（７）真夏の温泉宿

ｓｕｎｎｙは、頭痛をこらえながら　薬が、効いてくるのを待っていた。
なんとか、笑顔で過ごすことが、できてたつもりだった・・
でも、ｋｅｉには、ちゃんとばれていた。

「なんだか辛そうだけど、大丈夫？」

「うん・・ありがと。　ちょっと、頭痛がしてるだけ・・」

温泉宿へ行く前に、『自動車博物館』へ行った。
車が大好きなｋｅｉは、子どものように喜んだ。
ｓｕｎｎｙは、そんなｋｅｉの顔を見ていられるだけで、幸せだった。
写真も、ムービーも、たくさん撮った・・　撮られた・・

それから、スーパーで、お酒、おつまみなどの買い物をした。
かごを持ってくれる、ｋｅｉ・・
その後ろをついて回る、ｓｕｎｎｙ・・
二人で、品定めをし・・　かごに入れる。
なんだか、新婚さんのようで、恥ずかしくドキドキした。

温泉宿に、３時過ぎにチェックインした。
仲居さんに頼んで、すぐに、お布団を１組だけ敷いてもらった・・
二人は、浴衣に着替え、夕飯までの間、お昼寝をした。

ｋｅｉの腕枕が、心地よかった・・

食事の準備が整ったと、フロントから電話が入った。
その時、ｓｕｎｎｙは寒気がして・・　頭痛が、おこり始めていた。
浴衣の上に、ｋｅｉのシャツを羽織って、個室に向かった。
素晴らしいお料理の数々・・
二人は、再会を喜び合い、乾杯した。

「やっぱり、日本海の、海の幸はうまいな～！」

やがて、デザートが運ばれてきた時・・
ｓｕｎｎｙの頭痛は、耐え難いものになっていた。

「相当、辛そうだね・・　部屋に帰ろうか・・」

ｋｅｉにそう言われて、ｓｕｎｎｙは、抱きかかえられて、部屋に戻った。

「せっかくの夜なのに、ごめんね・・」

涙が、溢れた。
ｋｅｉは、布団の中で、一生懸命に、頭痛に効くツボを押してくれていた・・
薬も効き・・　やがて、頭痛も治まり・・
部屋に、内風呂があったので、一緒に、お風呂に入った。

その夜は、ｓｕｎｎｙの身体を気遣い、優しく抱いてくれた・・

「ｓｕｎｎｙ、誰よりも、一番愛してるよ・・」

ｓｕｎｎｙの中に、ｋｅｉのものを入れたままの状態で・・
二人は、ひとつにつながったまま、眠りにおちた。

翌朝・・　目覚めると、すっかり頭痛も、治まっていた。
ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉにせがんだ・・

「思いっきり抱いて・・」

ｋｅｉは、熱く、激しく・・　ｓｕｎｎｙを貪った。
何度も、頂点を迎えるｓｕｎｎｙ・・

「気持ちいかい？
最後は、二人同時に・・　逝こうね・・」

ｓｕｎｎｙは、痙攣し・・　ｋｅｉも、ｓｕｎｎｙの中で果てた。

「僕たちは、身体の相性も、抜群にいいね・・」

それから、二人で大浴場へ行き、朝食を食べ・・
チェックアウトまで、また、時間の許す限り、貪りあった。
ｓｕｎｎｙは、幸せの絶頂だった。

いつまでも、こうしていたい・・
時間が止まってほしかった。

第４章（８）真夏のデート

チェックアウトを、済ませた二人・・

最初に訪れたのが、『航空博物館』。
ｋｅｉは、大の飛行機好きでも、あるのだ・・
そこでも、ｋｅｉは喜び、子どものように走り回った。
飛行機操縦のシュミレーションゲーム・・
ｋｅｉの操縦する飛行機は、何度も墜落し、悔しがった。
ｓｕｎｎｙは、横で、大声で笑った・・

海岸線を、どんどん北上・・
とある港町の、『厚生食堂』で、昼食をとった。

「ｋｅｉには、厚生じゃなくって、更生だね。」

ｓｕｎｎｙが皮肉った。
大きな生岩牡蠣、お刺身、イカげそ・・
どれも、とても新鮮で、美味しかった。
もう、ｋｅｉに運転させるつもりはなかったので、アルコールを飲ませてあげた。
ｓｕｎｎｙも、すっかり食欲が戻っていた・・

有名な醤油蔵で、名物の『醤油ソフト』１個買い、堤防に座り、舐め合って食べた・・
ふと横を見ると・・　ｋｅｉは、堤防で放尿し始めた。

「最高だよ、　気持ちい～～～！」

こっそり、ｓｕｎｎｙはその後姿を、携帯に納めた・・

ｋｅｉは、上機嫌だった・・

「そろそろ、駅に帰ろうか・・」

駅まで、１０分ほどで着いた。

車を降りるとき、ｋｅｉが、抱きついてきた・・

二人は、長い長いキスをした。

「このＣＤ、気に入ったから、頂戴・・」

サザンの　『世に万葉の花が咲くなり』　だった・・

「いいよ・・　お土産にあげる。」

「ｓｕｎｎｙ、約束の指輪を、探しにいこう！」

まだまだ熱い二人は、手を繋いで、駅ビルの中に入っていった。

真夏の太陽に負けない、二人だった・・

第４章（９）真夏の別れとペアリング

二人は、駅ビルの中のいろんな宝飾店を、見て歩いた。
どこにも、チタンはなく・・
ペアリングがあったとしても、二人のサイズがなかったり・・
お気に入りがなかったり・・
それでも、やっと、見つけた。
全国的に知られてる店だった・・

「ｓｕｎｎｙ・・　シルバーだけど、アレルギー出ない？」

「う～ん・・　不純物や、化合物が少なければ、大丈夫だと思う・・」

ｋｅｉが、デザインを選び、２個とも買ってくれた。
人目もあったし、恥ずかしかったけど、お店の中で指輪交換・・
そして、キスをした。
やっと、目的を果たせた二人は、ニッコリ笑った。

電車の出発時間までに、まだ少し時間があった。
イタリアンカフェで、ｋｅｉは、ワインにチーズ・・
ｓｕｎｎｙは、アイス・カフェラテを飲んで、別れを惜しんだ。

「今度は、いつ逢えるの？」

「そうだな・・　次はきっと、９月だろうな。
僕は、来週から母を連れて、エジプトへ行く・・
ｓｕｎｎｙも、明日から仕事だろ？

僕には、『愛の糸電話』もあるし、ｓｕｎｎｙのムービーもあるし・・
この指輪もある。
ｓｕｎｎｙは、大丈夫かい？」

「うん・・　ｓｕｎｎｙも大丈夫。
寂しくなったら、電話もあるし・・
この指輪がｋｅｉだと思って、いつもそばにいるって思っておくね。
海外へ行ってる１０日間くらい、声が聞けなくても、きっと我慢できるよ・・」

考えてみれば、ｋｅｉと初めて逢ってから・・
１日たりとも、声を聞かなかった日はない。
不安だけど・・　きっと、大丈夫！

電車の時間が、迫ってきた。
京都駅での、二の舞だけはイヤだった・・
ｓｕｎｎｙは、入場券を買い、ホームまでついていった。
ホームの売店で、アルコールと、おつまみと、水を買い、ｋｅｉに持たせた。

電車が、ホームに入ってきた・・
デッキに立つ、ｋｅｉ・・
ホームに立つ、ｓｕｎｎｙ・・

「母に、僕の帰宅時間を、連絡しておいてくれないか・・
ｓｕｎｎｙ・・　明日から、仕事頑張れよ。

僕も早く就職して、ｓｕｎｎｙに、すぐ追いつくからな・・
愛してる。」

「うん、　わかった。
元気でね・・　エジプト気をつけてね。
愛してる・・」

背伸びをして、キスをした。
電車の出発時刻まで・・
本当に、ドアが閉まる、その瞬間まで・・
何度も、何度も、熱くキスをし抱き合った。
お互いに、涙でほほが、濡れていた・・

時は夕暮れ・・
ｓｕｎｎｙは、暑いホームで、電車が見えなくなるまで見送った。

第5章（1）それぞれに

温泉旅行の翌日から、ｓｕｎｎｙの仕事が始まった。
とある貿易会社・・　新会社である。
スーツに身を包み、颯爽と出社した・・
一緒に働く人は、外国人・・　男性ばかり。
いろんな言葉が、飛び交っていた・・

原因不明の頭痛は、一向によくならず・・
毎日、退社後に、鍼灸院に通っていた。

「心療内科・・　薬も、合わないんじゃない？
　いい先生、紹介してあげようか・・」

鍼を打ってもらいながら、先生が話してくれた。
ちょっと、冒険のような気もしたが、心療内科を変えてみることにした。
受診してみると、やはり原因は、薬による副作用であった・・

『減薬』・・

それがｓｕｎｎｙの、これからの治療方針となった。

さて・・ｋｅｉは、エジプト旅行へ向けて、忙しく準備をしていた。
その中、毎日のように、朝・昼・夕と話していた・・
旅行予定表も、送ってくれた。
母君と１０日の海外旅行・・

ｓｕｎｎｙは、どうか仲良く、無事に帰ってきてくれればいいなと、思っていた。

旅行出発日の朝・・
ｓｕｎｎｙは、自分の手の写真をメールした。

【この指輪を支えに、毎日あなたを待ってるね】

昼前、『愛の糸電話』が、鳴った。

「今から、行ってくる。
きっと無事に帰ってくるよ・・
身体、大事にするんだよ。　仕事も、頑張れよ。
じゃ、ｓｕｎｎｙ・・　いってきます！」

これからの１０日間・・『愛の糸電話』が、必要ない。
ｓｕｎｎｙは、電源を落とした。

暑い日だった。
空を見上げた・・
もう、ｋｅｉは、機上の人・・
無事の帰国を祈るだけだった。

第5章（2）手紙

ｋｅｉが、エジプトに旅立っていった・・
実際、寂しくないといえば、嘘だった。

ｓｕｎｎｙは、決めていた。
毎日、手紙を書こうって・・
夏らしい、可愛い絵葉書を、１０枚購入した。
ｋｅｉの旅行予定表を見ながら・・
ｋｅｉに思いを這わせ、毎晩、手紙を書いた。

【こんばんわ・・
今日は、カイロだよね。
おなか、壊してない？
こっちは、久しぶりに雨だったよ・・
仕事は順調だよ。

・・・

休日になると、一人で、最後にデートした　『厚生食堂』へ行ったみた。
ｋｅｉとのデートを思い出し、岩牡蠣を食べた。
デートの想い出が甦り、涙の味がした・・
二人で行った醤油蔵へ行き、お醤油や味噌、塩を買った。

「あら、お客さん・・　今日は、お一人なんですね。
　この前のお連れさんは？」

店員さんは、ｋｅｉとｓｕｎｎｙのことを、覚えてくれていて、ビックリした。

「あはは・・　実は彼、東京の人なんです。
　彼に、美味しい、お醤油や、味噌を、送ってあげようと思って・・」

帰国日に合わせて、お醤油や味噌、ｓｕｎｎｙ特製梅干、うどんなど・・
おなかに優しそうな、日本食を、送った。
エジプトは、水にあたる人が多いと、聞いていたから・・
無事に、帰国できるかな・・
中東は、治安もよくないし・・

ｋｅｉがいなくても、ｓｕｎｎｙの心は、ｋｅｉでいっぱい・・
そうやって、毎晩、手紙を書きながら、過ごした。

第5章（3）突然の再会

世の中には、偶然・・
予想もできない、出来事がある。

ｋｅｉが日本にいない、ある休日・・
ｓｕｎｎｙは、市内を、なんとなく車で走ってた。
信号待ちをしていると・・　後ろの車に、パッシングされた。

なんだろう・・

バックミラーを覗いた。
見覚えのある車から、見覚えのある男性が、手を振っていた・・

あ！Ｔ君・・

ずっと、ｓｕｎｎｙの後をついてくるので、とあるビデオ屋さんの駐車場に入った。
Ｔ君の車もついてきて、ｓｕｎｎｙの車の横に停まった。

「やぁ・・　ｓｕｎｎｙ、久しぶり。」

Ｔ君が、車から降りてきて、そう言った。

「ほんと、久しぶり・・　元気だった？」

「どこか、行くの？　食事でもしない？」

「う～ん・・　ダメ、用事あるから・・　ごめんね。」

別に、用事はなかったけど、ｓｕｎｎｙは、とっさに防衛心が働いた。

ちらりと、薬指に視線を感じた・・

「そっか・・　冷たいな、仕方ないか。」

そう言って、３０分ほど、そのまま話してた。

ｓｕｎｎｙは、誰かに見られてはないかと、ドキドキした。

以前は、どんなところでも、堂々と手をつなぎ、デートしていたというのに・・

Ｔ君は、あれから誰とも付き合ってもないし、ましてや、結婚もしていなようだった。

ｓｕｎｎｙは、自分の事は、何一つ話さなかった・・

諦めたように、Ｔ君は車に乗り、去っていった。

突然の再会に、ｓｕｎｎｙは動揺した。

しかも、ｋｅｉが日本にいない間に、こんな出来事が偶然おこるなんて・・

ｋｅｉに、秘密ができたようで、心が痛んだ。

第5章（4）帰国

ｋｉｅが、帰国する日になった・・
朝から、ｓｕｎｎｙは久しぶりに　『愛の糸電話』の電源を入れた。
帰国予定時間は、午後１２時５５分。
どうか、無事に着きますように・・
そればかり思っていた。

１時すぎ、ネットで飛行機が、成田に到着したのを確認した・・
無事に、帰ってきたのだ。
嬉しくてたまらなかった・・
今頃、入国手続き、税関などで、夕方には自宅に帰るのかな・・
ｓｕｎｎｙは、計算していた。
いつ、どの段階で、連絡をくれるのだろう・・
ドキドキワクワクした。

ｓｕｎｎｙが、着日指定で送った日本食などの荷物は、午後７～９時着指定。
きっと、帰宅に間に合うだろう。
喜んでくれるかな・・
手紙も、いつの分まで届いてるのかな・・
いろいろ考え、ｓｕｎｎｙは、ひとり楽しんだ。
でも、夜になっても　『愛の糸電話』は鳴らなかった。
何かあったのかな・・

もしかしたら・・　帰国の日を、間違って計算してしまったのだろ

うか？
何度も何度も、旅行予定表を確認した。
間違うはずがない・・

「帰国したら、１番に連絡するからね。」

ｋｅｉは、そう言ってくれてたのに・・
夜半・・　ネットで、こちらからの荷物の、受け取り確認をしてみた。
ちゃんと、受け取りされていた。
疲れて、寝ちゃったのかな・・
ｓｕｎｎｙは、自分から　『愛の糸電話』を鳴らさなかった。
待とうって思った。

きっと、明日には、連絡してくれるはず・・
早く、ｋｅｉの元気な声が、聞きたかった。

第5章（5）お土産

翌日の昼過ぎ、やっと　『愛の糸電話』が鳴った。

「ｓｕｎｎｙ、　おはよう。
旅行中ずっと、酷い下痢で、大変だったんだ。
まだ、治らないんだ。
さっきまで、寝てた・・」

やっぱり・・　そう思った。

「旅行中、たくさんの手紙、ありがとう。
毎日、書いてくれてたんだね・・
まだ、届くのかな？」

「うん・・　昨日、最後の葉書を投函したのよ。
楽しみにしていてね・・」

「日本食もありがとな。
さっき、うどん湯がいて、梅干と食った・・」

ｓｕｎｎｙは、仕事中だったので、余り時間がなかった。
すぐに、電話を切った・・
夕方、かけてみようかな・・　そう思った。

旅行は楽しかったのかな・・
母君と、仲良く喧嘩せずにいられたのかな・・
いろいろ考えながら、午後の仕事を頑張った。

でも夕方、電話をしてみたが、出てくれなかった。
きっと、疲れてるんだろう・・　時差ぼけもあるかもしれない・・
そう思ってた。

翌日、朝一番にメールが来た。

【今日着で、お土産が届くよ。】

すぐに電話してみたが、相変わらず、出てくれない・・
ｓｕｎｎｙは、そんなに下痢が酷いのかなと、心配だった。
その日も、昼間は１日、連絡がなかった。
帰宅すると、不在票が入っていたので、郵便局まで取りに行った。

すごく大きな、プラチナと１８金のピアス
シルクのターバン
らくだの骨のネックレス
などなど・・

箱から、たくさん出てきた。

ｓｕｎｎｙは、ピアスをはめ写真を撮って、早速ｋｅｉにメールで送った。

【すごく、似合ってるよ】

すぐに、返信がきた・・
ｓｕｎｎｙは、嬉しかった。

だけど、どうして　『愛の糸電話』で、話してくれないのだろう・・
ちょっぴり、寂しかった。

第5章（6）August

8月になった・・
ｓｕｎｎｙは、会社にも、少し慣れてきていた。
でも、あいかわらずｋｅｉは、まだやる気が、でないようだった・・
『愛の糸電話』で、話すことも、メールも少なくなってきた。
そうなのだ・・
ｋｅｉが、また堕ちた。

「外は暑いし、旅行から下痢が治らないし・・
体調が悪いんだ。
求職活動も、する気になれない。」

毎日ダラダラと、寝ていることが、多くなっていた。
ハローワークへ、ちっとも、行かなくなっていた。

電話での会話も、面倒くさそうに話されると・・
ｓｕｎｎｙも、イライラした。

「少し、気分転換でもして、飲みにいったり、遊びにいったりしたら？」

そう、もちかけると・・

「実は・・　金がないんだ。」

そうなのである。
リストラに遭ってから、旅行三昧し、荒れた生活、飲み歩き・・

そして、海外旅行・・
とうとう、残高が、マイナスになってしまったと、いうのだ。
「じゃ、尚更はやく、就職しなくっちゃ・・」
「わかってはいるけど、そういう気分に、なれないんだ・・
もう、ホームレスになってもいい・・
ここに居ることが、苦痛でたまらないんだ。
キチガイの1歩手前なんだ・・
家が嫌でたまらない。」
そんな弱気の、繰り返しだった。
そのうち、些細な事で、よく喧嘩するようになった・・

ｓｕｎｎｙは、悲しかった。
なんとか、早く就職して、生活の立て直しをして欲しかった。
そう願っていたのだけど・・
ある日、決定的な出来事が、起こってしまった。

第5章（7）疑い

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉを疑うようになった。
いつも、気持ちが通じていないのだ・・

「このＣＤを聞いていると、もう二度と、逢えないような気がする・・
逢っては、いけないような気がする。」

それは、ｓｕｎｎｙがあげた『世に万葉の花が咲くなり』だった。
『慕情』と言う曲だった・・

Ｙｏｕ Ｋｎｏｗ ｍｙ ｈｅａｒｔ ｉｓ ｏｎ ｔｈｅ ｗａｙ ｔｏ ｂｒｅａｋｉｎ' ｄｏｗｎ.

【私の心が壊れていくのを、あなたは知っている・・】

「今日は、どうしてるの？」

「ｓｕｎｎｙには、関係ない・・
俺が何をしようと、勝手だ。
ほっといてくれ・・
ｓｕｎｎｙから、逃げることになる。」

お金がないということは、こんなにも、心まで、乏しくしてしまうものなのだろうか・・
いったい、ｓｕｎｎｙが、何をしたんだろう。
ｋｅｉは毎日、何をしてるのだろう・・

いつも不安で、ｋｅｉを疑っていた。
もしかしたら、他に誰に、好きな人ができたのかな・・
盆も明けたある日、ｋｅｉから連絡があった。
「就職が決まった・・
来週から働く。　もう、電話やメールは、日常できない。」
「じゃ、『愛の糸電話』は、必要なくなっちゃうの？」
それが、発端だった・・
「そんなに、俺が信じられないのか！
もういい！　今から、解約してくる・・」
「いや・・　ごめんなさい。」
ｓｕｎｎｙが懇願しても、無駄だった。
解約直前に、『愛の糸電話』が鳴った。
「俺は明日から働く・・
俺から連絡するまで、ｓｕｎｎｙから一切連絡しないって、約束できるか？
約束できないのなら、解約する！」
「そんなの、自信ないよ。」
滅茶苦茶だった・・

その直後、『愛の糸電話』は、使用不能になった。

第5章（8）就職そして無職

月曜日から、ｋｅｉが働き始めた。
ｓｕｎｎｙは、連絡をしてはいけないと、言われていたにもかかわらず・・
就職初日の夜、ｓｕｎｎｙはメールしてしまった。

【おかえりなさい。
明日も、お仕事頑張ってね！】

しばらくして、返信があった。

【約束破ったね。
次にメールきたら、着信拒否にする！】

何がｋｅｉを、そんなに、追い詰めているのだろう・・
悲しかった。
男の人が働くとは、そんなに大変なことなんだろうか・・
もう、ｋｅｉにはメールしないと、心に決めた。

それから3日後・・
ｋｅｉから、メールがきた。

【今、慣れない仕事に、体力と精神力で戦ってる。
この仕事は、ｓｕｎｎｙが想像する以上に過酷で危険だ。
この先、3年とか5年とかしても、ｓｕｎｎｙを養う自信はないな。
母のこともあるし、ｓｕｎｎｙには、まだまだ待ってもらいたい。

周に1，2度くらいならメール下さい。
返信できないかもしれないけど・・】

ｓｕｎｎｙは、涙が出た。
嬉しかった。
ｋｅｉは、頑張っているのだ・・　信じようと思った。

やがて週末になり、ｋｅｉから電話があった。

「ｓｕｎｎｙ、久しぶり・・　一週間、疲れたよ。」

そしてｋｅｉが、初めて仕事の話をしてくれた。
危険な仕事だと思ったと同時に・・
ｓｕｎｎｙは、その会社自体の危険性を、察知した。
ｋｅｉに、就職先の会社名を、教えてもらった。
ｓｕｎｎｙは仕事柄、企業調査もしている・・
思った通り、ブラックリストにある会社だった。
ｓｕｎｎｙは、それを正直に、ｋｅｉに話した。

「その会社、悪いけど、お薦めできないよ・・
短期で働くのならまだしも、将来性がないよ。
1年2年、いや、今年持つかわからない・・
社会的保障も杜撰だし、ｓｕｎｎｙの言うことだけで、決めなくてもいいけど・・
早く辞めたほうが、いいと思う・・
お友達に意見を聞いて、もう一度、よく考えてみて・・」

ｋｅｉは一週間、その会社に疑いを持ちながらも、頑張ってきていたそうだ。

そんなところで、埋もれてほしくないと思った。
次の日、また電話が鳴った。

「いろいろ、友達にも相談してみたんだけど・・
やっぱり、辞めようと思う。
雇用保険の再受給は、また受けられるののかな？」

「それなら大丈夫だよ。
すぐに、再受給手続きができる。
明日にでも、ハロワに行っておいで・・」

「うん・・　また無職に戻るのかと思うと、不安が込み上げる。
今度からは、きっと、ｓｕｎｎｙに相談する・・」

「何もしてあげられないけどね・・
たまたま、ｓｕｎｎｙは、そういう職務に就いてるんだから・・
大いに、利用しないとね。」

二人は、久しぶりに笑った。
また、ふりだしに戻った。

９月になろうとしていた・・
ｓｕｎｎｙは、密かに、東京へ行く計画をしていた。

「ｋｅｉは、ｓｕｎｎｙに逢いたい？　少し家から、解放させてあげようか・・」

「ほんとに？　俺、お金ないけど・・　いいの？」

ｓｕｎｎｙは、土日を利用して、有給を取った。
２泊３日の、『プチ同棲』をするために・・

第6章（1）ＬＯＶＥ　ＰＨＡＮＴＯＭ～プチ同棲～

ｓｕｎｎｙは、プチ同棲のために、いろいろ準備した。
まずは、宿泊先・・
自炊がしたかったので、家電・家具・生活用品一式付きの『ウィークリーマンション』を借りた。
場所は、ｋｅｉに選んでもらった。
ｋｅｉが選んだのは・・　生まれ故郷、赤坂だった。
往復の旅費、滞在費、食費など・・　１０万円用意した。
ｋｅｉに、好きなことを、させてあげたかったから・・
お揃いのお箸、お米を少量、ｓｕｎｎｙ特製梅干、ビール券、着替えをバッグに詰めた。

ＬＯＶＥ　ＰＨＡＮＴＯＭ　～愛の錯覚～

金曜日から日曜日まで、２泊３日のプチ同棲・・
いよいよ、出発の日になった。

午前中は出社し、昼１番の電車で、ｋｅｉの待つ東京駅へ向かった。
久しぶりに逢える！
ｓｕｎｎｙは、心躍らせていた・・
すると、ｋｅｉからメールが入った。

【お揃いのシャツ・・　恥ずかしいから、いいよね】

え？
ｓｕｎｎｙは、もう着ていた。

なんだか、寂しかったけど、電車の中のトイレで、別の洋服に着替えた。

【あと・・　外で、ベタベタするのは嫌なんだ】

都会では、そういうことはしては、いけないのかなって思った。
ｋｅｉは、いつもベタベタすることが、好きだったのだ・・
そう、ｓｕｎｎｙは思っていたから、ちょっと意外だった。
在来線から、新幹線を乗り継ぎ、夕暮れと共に東京に近づいていった。
ドキドキワクワクした・・
ｋｅｉ、ホームで抱きしめてくれるかな？
早くキスしたいな・・

東京駅に着いた。
ｋｅｉを探した・・　混雑していた。
いない・・　どこ？
後ろから、声を掛けられた。

「ついておいで・・　いくぞ。」

それだけだった。
ｋｅｉの歩く速さに、ついて行くだけで精一杯だった。
電車に乗り、赤坂に着くまで、何も話さなかった・・
ｓｕｎｎｙは、泣きたい気持ちで、いっぱいになった。
不安だった・・
これからの、２泊３日・・　楽しめるのだろうか？
ｋｅｉの顔を見た。
もう、２ヶ月前までの優しさが、なくなっていた。

第6章（2）LOVE　PHANTOM～IN　赤坂～

二人は、赤坂に降り立った。
東京は、夜でも蒸しかえるように、暑かった。
初めて、言葉を交わした・・

「ｋｅｉ・・　ここからは、近いの？」

「うん、近いよ。　ここは僕の地元なんだ・・
ルーツそのものの土地なんだよ。」

坂道が、多かった。
ｓｕｎｎｙは、ハァハァ言いながら、ついて行った。
マンションが見えてきた・・

「住所からいくと、たぶんアレだよ。」

名前を見た・・　その通りだった。
ロビーで、チェックインし、2泊分の滞在費を払った。
食器・台所用品を借りて、部屋へ急いだ。

思ったより、素敵なワンルームだった。
広いし、家具もシンプルで、ベッドも大きかった。
ただ・・　キッチンだけ、狭いなと思った。
ここで、2泊3日・・　一緒に暮らすのだ！

「ｓｕｎｎｙ、疲れただろう？　こっちへおいで・・」

ソファーでくつろぐ、ｋｅｉに呼ばれた。

「うん・・　座ったら動きたくなくなっちゃう。
ご飯だけ、先にセットしたいから・・」

持ってきたお米をとぎ、炊飯器にセットしてから、ｋｅｉのそばに座った。
初めて、キスをした・・

「よく、来てくれたね・・　ありがとう。」

ｋｅｉの手が、伸びてきた。

「待って、お買い物に行かなくっちゃ・・」

近くのスーパーへ、二人で、買い物へ行った。
今夜はもう遅いから、すぐに食べられるものを買った。
たこのお刺身、フライドチキン、生野菜、チーズ、明太子、たまご、のり、味噌汁・・
一番小さな、調味料各種・・
そして、飲み物・・　ワイン、焼酎、ビール、水、お茶・・
大きな袋が三つになった。
ｋｅｉが、荷物を持ってくれて、また部屋に帰ってきた。

「すぐに、お食事の準備するね・・」

ｓｕｎｎｙは、食材をそのまま、出すのは気が引けたので・・
包丁を上手く利用し、形を変えて、お皿に可愛く盛付けた。
輪島塗の、ペアのお箸を出した。

「かんぱ～い！」

最初は、険しかったｋｅｉの顔が、だんだんと、解き放たれていくのがわかった。

ｓｕｎｎｙは、嬉しかった。

そして、キスを何度も、せがんだ・・

第6章（3）LOVE　PHANTOM～夜事～

だいぶ、お酒もすすみ・・
ｋｅｉの口から、愚痴が溢れ出た。
ｓｕｎｎｙは、それを聞きに、ここまできたのだ。

母君のこと・・
お金のこと・・
求職活動のこと・・

延々と、続く愚痴を、ｓｕｎｎｙは頷き、黙って聞いた。
最初は、横に座っていたが、おつまみが無くなると、作りに立ち・・
自分の荷物、ｋｅｉの荷物を、引き出しに納めたり・・
お風呂を沸かしたり・・
洗い物をしたりしながら、とことん聞いてあげた。
話すだけ話すと、ｋｅｉは、ニッコリ笑った・・

「ｓｕｎｎｙ、ありがとう。」

ｓｕｎｎｙは頷き、先にお風呂に入った。
洗顔、洗髪、身体を洗い、シャワーで流していると、突然後ろに、
人の気配を感じた。
降り返る間もなく、後ろから抱きしめられた。
ｓｕｎｎｙは、涙が溢れ出た。
振り返り、ｋｅｉの胸で、声を上げて泣いた。

「ずっと、逢いたかった・・　嬉しい。」

「ｓｕｎｎｙ、僕もだよ。」

ｋｅｉの身体を、隅々まで洗ってあげた。
そして、二人で、ゆっくりバスタブに浸かった・・
こんな生活もいいなと、改めて思った。
二人で、身体を拭き合い、寝衣をまとった。

ソファーで、膝枕をして、耳掃除、眉のお手入れをしてあげた。
ｋｅｉの顔が、凛々しくなった。
どちらからともなく、ベッドに入った・・
二人とも、下着を着けていなかったので、あっという間に、全裸になった。
懐かしいｋｅｉの匂いを感じて、ｓｕｎｎｙは萌えた・・

「ｋｅｉ、今夜はｓｕｎｎｙがたくさん、愛してあげる。」

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの身体中を、愛撫した。
ｋｅｉは、声を上げた・・
その間も、ｋｅｉは、ｓｕｎｎｙの一番感じるところを、攻めていた・・
温かいものが、内股をつたっていくのがわかった。
そして、ｋｅｉと重なった・・
お互いに、相手の身体に、自分の欲求をぶつけ合った・・
激しかった。
万の物を貪りあう、動物のようだった。

【貪欲】　ぴったりの言葉だ。
二人は悲鳴に近い声を発し、同時に果てた。
お互いに、歯型や痣だらけ・・　出血もしていた。

獣のような夜事だった・・

第6章（4）LOVE　PHANTOM～奴隷な朝～

翌日、ｓｕｎｎｙは早起きして、ランドリールームへと向かった。
洗濯中に、朝食の準備、身支度を整えた。
そして、全てを終えた頃・・
ｋｅｉが、目を覚ました。

「おはよ・・　ｓｕｎｎｙ、今何時？」

「おはよう、１０時前だよ。」

それから、朝食を温め直し、二人で食べた。

「美味しい？」

「うん・・　うまいよ。」

朝食後、後片付けをしていると、呼ばれた。

「ｓｕｎｎｙ、こっちへおいで。」

ｋｅｉは、ソファでテレビを観て、くつろいでた。
いきなり引き寄せられ、下着だけを、剥ぎ取られた・・

「ちょっと、まって・・　こんな格好、恥ずかしいよ。」

四つん這いになり、ｋｅｉのものを含まされて・・　ｓｕｎｎｙは
悶絶した。

「優しくしてくれ・・　昨日のせいで、痛いんだ。」

「はい・・」

なんだか、奴隷のような気がした。
その間、ｋｅｉは手で、ｓｕｎｎｙを攻め続けていた・・
ｓｕｎｎｙは、何度も頂点を迎え、気が遠くなった。
そのうちに、口に熱いものを注がれ、行為は終った・・
こんな事を、経験したのは初めてだった。
ｓｕｎｎｙは、涙が出て、止まらなかった・・

「大丈夫かい？　ゴメンナ・・」

そう言ってｋｅｉは、シャワーを浴びにいった。
その間に、後片付けの続きをし、ｋｅｉの身支度の準備をした。

「さぁ、一緒に、僕のルーツをたどろう・・
ｓｕｎｎｙは、行きたいところがあるかい？」

「うん・・　東京タワー。」

ｓｕｎｎｙは、まだ、足元がふらついていた・・
二人は、お揃いのシャツを着て、マンションを出発した。

第6章（5）LOVE　PHANTOM～後ろを歩く～

二人は、マンションを出て、歩きだした。
残暑が厳しく、とても暑い日だった・・

ｋｅｉの通った、小学校跡地・・
通学路・・
よく遊んだという、公園・・
よくデートしたという、神社・・
子どもの頃の思い出を、ひとつ、ひとつ説明してくれた。
神社では、この暑い中、結婚式が、とり行われていた。
綺麗な花嫁さんだった・・

「おめでとうございます！」

二人は、声を掛けた・・
新郎・新婦の笑顔が、まぶしかった。

てくてく・・　ｋｅｉの後ろを、ひたすら歩いた。
信号などで停まり、手を繋ごうとすると、振り払われた・・

「ベタベタしない、約束じゃないか・・」

六本木、麻布・・
てくてく、ひたすら歩いた。

「のど、渇いちゃった・・　休憩しようよ。」

ｓｕｎｎｙは、歩きつかれて、そう言った。
二人は、とあるカフェで、休憩する事にした。
午後三時・・　涼しい店内に入り、二人は目を見開いた！
カウンターには、世界各国のビールが並んでいたのだ。
オープンサンドと、マスターのお薦めの『木苺の発泡酒』・・
二人は乾杯し、喉を潤した。
気さくなマスターと、ｋｅｉが話すのを、横でずっと聞いていた。
マスターにお願いして、二人の写真を撮ってもらって・・

「東京タワーまで、頑張って歩いてくださいね～！」

励まされ、店を出た。
てくてく・・　また、後ろを歩いた。

「ｓｕｎｎｙ！　もうすぐだよ・・」

ｋｅｉが、指差した方向に、東京タワーが見えていた。
二人は、歩いた・・
夕暮れ間近、東京タワーが目前にあった。

「昇ろうよ・・」

お互いに、展望まで昇るのは2度目だ・・
東京が、一望できた。
こんなお天気がいいのに、霞にかかってる東京の街・・
ｓｕｎｎｙは、カメラに納めたが、寂しくなった。
きらめくような都会、東京だけど・・　砂漠のように、感じられた。

ちょっと、センチメンタルになってしまったｓｕｎｎｙ・・
ｋｅｉは、帰りは優しく、手を引いてくれた。
そしてタクシーを止めてくれて、マンション近くのスーパーまで、帰った。
タクシーの中、ずっと、足をさすってくれた・・

「たくさん歩いて、疲れただろう。」

車社会の中で生活しているｓｕｎｎｙには、東京での生活は無理かな・・
と、感じた一日だった。

第6章（6）LOVE　PHANTOM～元料理人～

「ｋｅｉ・・　今夜は、何が食べたいの？」

スーパーに入るなり、ｓｕｎｎｙは聞いた。
昨夜から、始まったばかりの『プチ同棲』・・
もう、最後の夜なのだ。

「ん～、胃が痛いんだけど・・　久しぶりに肉が食べたい。」

生肉売り場にいくと、ステーキ肉があった。
ｓｕｎｎｙは、お肉は苦手だったけど・・　ｋｅｉの望みを叶えてあげる事にした。
マンションの冷蔵庫の中を、明日の朝には『カラ』にしなければいけない・・
最低限の食品を、購入した。

マンションに帰り、ｓｕｎｎｙは座り込んでしまった。
足が、もう棒のようだった・・

「疲れたんだろ・・　休んでからでいいよ。」

そう言ってくれたので、先にシャワーをすることにした。
バスタブに、たっぷりお湯をはって、足の疲れを癒した・・
待っても、待っても、ｋｅｉが入ってくることはなかった。
あ・・
ｓｕｎｎｙは、下着の用意をするのを忘れていたことに気が付いた。
バスタオルに身を包み、クローゼットまで走った・・

ふと、ｋｅｉの視線を感じた。

「おい、部屋を裸で走るか？！」

そう言われて、恥ずかしくなった。
それから、食事の用意をした・・

「ね・・　ステーキだけ焼いてくれない？」

「あぁ、いいよ。」

キッチンに立つｋｅｉを見た瞬間、違うと思った。
元料理人のｋｅｉ・・　オーラがあるのだ。
そして、包丁の扱い方、フライパンの扱い方、立ち振る舞い方・・
素人とは、まるで違う。
ｓｕｎｎｙは、食い入るように横から見つめていた。
『ステーキ』は、あっという間に、プロの手によって、焼きあがった。

「ありがとう・・
後は、今朝の残りご飯で、ガーリックライス作るね。」

ｓｕｎｎｙは、そのフライパンを利用して『ガーリックライス』を作った。
おつまみと、ワインを並べ、最後の晩餐は豪華なものとなった・・

お肉嫌いのｓｕｎｎｙだったけど・・
初めて、ｋｅｉの作ったものを食べてみた。

「美味しいね！」

これが、プロの味なんだ・・　そう思った。

食後、ｋｅｉがお風呂に入ってる間に、片づけをした。
ｓｕｎｎｙの疲れは、限界だった。
ソファーで横になって、テレビを観ているうちに、不覚にも寝てしまっていた。
でも、気が付くと、ちゃんとベッドに、寝かされていた・・

ｋｅｉの腕枕で、布団を掛けて寝かされていた。
愛おしい寝顔が・・　すぐそばにあった。
ｓｕｎｎｙは、眠っているｋｅｉの胸に、そっとキスマークをつけた・・

第６章（６）ＬＯＶＥ　ＰＨＡＮＴＯＭ～元料理人～（後書き）

☆読者のみなさんへ☆

いつも、お読みいただきありがとうございます。
いよいよ『あなたをまつ』も、第５０話を迎えることができました。
たくさんの方に、お読みいただき、励ましていただき、ここまできました。
ありがとうございます。

まだまだ未熟ではありますが・・
みなさんが楽しんで読んで下さるような小説を、目指して頑張ります。
『あなたをまつ』を、これからも宜しくお願いいたします。

＊＊ｓｕｎｎｙ＊＊

第6章（7）LOVE　PHANTOM～プチ同棲終了～

ｓｕｎｎｙは、早起きした。
昨夜は、ゆっくり眠れたので、目覚めもよかった・・
音を立てないように、着替えを済ませ、キッチンに立った。
胃が痛いｋｅｉのために、お粥を炊く準備をした。
それから、ランドリーへ急いだ・・
コンビニへ、フルーツジュースを買いにいった。
全てを終えて帰ってきても、ｋｅｉは、まだ寝息を立てていた・・

ｓｕｎｎｙは、シャワーで汗を流し・・
下着姿で、そっと、ｋｅｉの布団に潜り込んだ。
そして、ｋｅｉの寝衣を脱がしていった・・
すでに、ｋｅｉの身体は目覚めていたけど、本人は、まだ眠っているようだった。

「ん～、今何時？」

やっと、目覚めてくれた・・

「朝食にする？　それとも・・」

ｓｕｎｎｙが、そう言うか言わないかの間に、下着を剥ぎ取られた。

「昨日はごめんね・・　先に寝てしまって。
ベッドまで、運ぶの重かったでしょ・・」

「いいよ。疲れてたんだろう・・

でも、イビキかいてたぜ。」

恥ずかしかった・・

「ごめん・・」

「仕方ないさ・・」

Ｋｅｉが、貪り始めた。

ｓｕｎｎｙも、負けないで貪り始めた・・

「今日は、どうされたい？　ここか？　ここか？」

なんだか、ｓｕｎｎｙの目から、涙が溢れてきた。

これは、愛なんだろうか・・　疑問に感じた。

でも、気持ちとは裏腹に、ｓｕｎｎｙの身体は、何度も頂点に達する。

身体が、痙攣し始めた頃、ｋｅｉが貫いてきた。

「だめ・・　気が、おかしくなっちゃう。」

「おかしくなってもいいさ。もうお互いに、おかしいんだから・・」

「あ・・　だめ、もれちゃう。」

ｓｕｎｎｙは、恥ずかしい事に、初めて失禁してしまった。

それでも、動きを、やめてくれる気配はない・・

「可愛いよ・・　最高の絞めつけだよ・・　もっと、乱れていいよ。」

二人は、汗だくだった。
汗なのか、体液なのか、老廃物なのか・・　シーツは、シミだらけになってた。

「ｋｅｉ、愛してる？」

「愛してるよ・・　一番、愛してるよ。」

その言葉と同時に、ｋｅｉは、ｓｕｎｎｙの中で果てた。
そして、ｓｕｎｎｙは自分の口で、ｋｅｉのものを、綺麗にふき取ってあげた。
その間、ずっと髪を撫でられていた。

「生ジュースあるか？　それに、おなか空いたな・・」

冷蔵庫から、買っておいたジュースを出して、二人で口移しで飲みあった。
二人一緒にシャワーをし、二人一緒に身支度をした。

「ｋｅｉ、胃が痛いって言ってたでしょう？
今朝は、お粥と梅干にしたのよ・・
卵は、目玉焼き？　スクランブルエッグ？　オムレツ？　どれがいい？」

「ふわふわの、スクランブルエッグ！」

ｓｕｎｎｙは、『スクランブルエッグ』が得意なのだ。
鼻歌混じりに作った『スクランブルエッグ』・・
今日は、とびきり、ふわふわに仕上がった。

食卓には、冷蔵庫の中身全ての品が、色とりどりに並んだ。
スクランブルエッグ、ボイルウインナー、明太子、チーズ、梅干、残り少ない生野菜・・
そして、お粥とお味噌汁。

「いただきます！」

二人一緒に食べ始めた。

「お粥、スクランブルエッグ・・　最高の出来だ！」

ｋｅｉは、おかわりしてくれた。
ｓｕｎｎｙは、素直に嬉しかった・・
【料理は愛情だ！】　そう以前、言ってくれたのを、思い出した。

食後、食器類、調理器具を全て、綺麗に片付け・・
二人一緒に、乱れきったベッドだけは、どうしようもないねと、笑いあった。

いよいよ、プチ同棲も終わり・・
チェックアウトの時間が迫っていた。

第6章（8）ＬＯＶＥ　ＰＨＡＮＴＯＭ～別れ～

チェックアウト後、二人はタクシーで新橋へ出た。
荷物を、駅のコインロッカーに預けた。

「今日は、帰りの時間に限りがあるよな・・
どこへ、いこうか？」

「久しぶりに、浅草・・　行きたいな。」

浅草駅に降り立ち、隅田川のむこうに・・　あの有名な、金のう●こが見えた！

「うわ～！　間近でみると、すごいね！」

ｓｕｎｎｙは、はしゃいだ。
屋形船に乗ろうと、思ってくれてたらしのだが、時間がなく乗れなかった・・
二人は、離れないように、浅草寺へ向かった。

「こら！携帯なんか触りながら、歩くと危ないぞ！」

ｋｅｉに、叱られた。

浅草は、どこもかしこも、人で溢れ返っていた・・
浅草寺でお参りをして、ちょっと子どもっぽいけど、花やしきへ行った。
絶叫マシンに乗り、大はしゃぎの二人・・
狭い遊園地を、二人は、走り回って遊んだ。

一体、他人の目には、この二人は、どう映るのだろう・・
ｓｕｎｎｙもｋｅｉも、童心に返って遊んだ。

「おなか・・　空いたね。」

二人は、お寿司屋さんへ入った。
焙り寿司盛合せと、ビールを頼んで、二人で分け合って食べた。

東京に来てから、支払いは全て、ｓｕｎｎｙがしてきた。
しきりに、いくらかな～と計算するｋｅｉ・・
最後くらい、ｋｅｉも払いたそうな感じが、見受けられたので、思い切って言った。

「最後は、ワリカンにしよっか・・」

「そうしてくれる？」

嬉しそうな、ｋｅｉの顔が伺えた。
きっと、ずっとｓｕｎｎｙが支払いをしてきた横で、嫌な思いしてきたんだろうな・・
プライドだってあるだろうし・・
ｓｕｎｎｙは、半分より少し多いお金を、机に置いた。
置いたつもりだった・・

「金を、投げるとはなんだ！
　１００万、２００万、貸してもらうんじゃないんだ！」

ｋｅｉが、急に怒りはじめた。

「投げてなんてないよぅ・・　いい、私が払うから！」
支払いをし、店の外へ出て、当てずっぽうに歩き出した。
ｋｅｉが、慌てて出てきた・・
「どこへ行くんだ！　待たないか・・　ｓｕｎｎｙ！」
「こういう時、なんていうの？」
「ご馳走様でした・・」
そして、ｋｅｉの後ろにまわり、ｓｕｎｎｙは一歩さがって、歩き出した。
しばらくして、ｋｅｉが振り返った・・
「もう、東京駅まで送らない。　一人で帰れ！」
また、怒らせてしまった。
どうしよう・・　ｓｕｎｎｙは、東京は、わからないに等しい。
「コインロッカーの荷物、どうするの？」
「そうだったな・・　やっぱり、東京駅まで送ってやるよ。」
それから、無言で歩き、電車に乗り、荷物を取り、東京駅に着いた。
ｓｕｎｎｙは、お土産らしきものをひとつも買ってないことに気付き、慌てて買った。
新幹線までには、１時間くらい時間があった・・
とあるカフェで、空席を見つけ、二人は、最後の時間を過ごした。
だんだん時間が迫ってきた。

新幹線発車１０分前、改札口で・・

「じゃ！」

と、言われた。

「え？　ホームまで送ってくれないの？」

大粒の涙をこぼして言った。

「朝から決めてたんだ。　ここでお別れだ・・」

ｓｕｎｎｙは、イヤイヤして、抱きついて泣いた。

でも、振りほどかれるばかりだった・・

もう、５分を切っている・・

ｓｕｎｎｙは、背伸びをして・・　ｋｅｉにキスし、背中を向けて走り出した！

振り返る余裕もなかった・・

新幹線の飛び乗り、まわりの目も気にせず、しゃくりあげて泣きながら帰った。

第7章（1）自由の身と既婚者

ｓｕｎｎｙが、プチ同棲を終えて帰ってきてから、連絡が取れなくなった。
電話もメールも、完全に無視された・・
なんでだろう？
そんな不安の中、１週間が過ぎた週末・・
ｋｅｉから、メールが来た！

【今から、ＰＣの前に座れ！　メッセンジャーを立ち上げてる】

ｓｕｎｎｙは、言われる通りにして、準備ができたことをメールで伝えた。
メッセンジャーが始まった・・

【お前と、同棲は最悪だった。】

【ベタベタは、嫌だと言ったはずだ。】

【関西弁を話す女は、嫌いだ。】

【イビキをかく女は、嫌いだ。】

【裸で、部屋を歩く女なんて初めて見た。】

など・・　たくさん書かれた。
ｓｕｎｎｙは、何がなんだかわからなくて、ただただ、泣いていた。

【もう、お前とは逢うつもりはない・・
生活環境が違いすぎる。
別れよう。】

そう、書かれた。
ｓｕｎｎｙが、いやと、懇願してもダメだった・・

【俺は、独身・・　自由の身なんだ！
お前は、既婚者だ。
ゴメンナ・・
嫌いになったわけではないんだ。
好きだけど、わかってくれ・・
どうか、追わないでくれ。
逃げることになる・・
俺は、明日から『ホームレス』になる。
最後に、お粥とスクランブルエッグは・・　最高にうまかった。
さようなら 】

そして、メッセンジャーは、オフラインになった。

ｓｕｎｎｙのどこが、いけなかったのだろう・・
ただただ、涙が出てきた。

ｋｅｉは、一体どうしちゃったんだろう・・

突然の別れ話に、ｓｕｎｎｙは一晩中、眠れなかった。
もう、どうしたらいいのか、わからなかった。

第7章（2）突然の電話

突然の意味のわからない『別れ話』に、ｓｕｎｎｙは、毎日泣いて暮らしていた。
食べることができなくなり、仕事にも身が入らなかった。
気がつくと、涙が溢れてて・・
そんな、辛い日を送っていた。
ｋｅｉに、連絡を取りたかったが、これ以上嫌われるのが怖くて、できなかった・・

そんなある夜・・
電話が鳴った！
ｋｅｉからだった。
おそるおそる、電話に出た・・

「もしもし・・」

「俺だ！今度、東北へ車を取りに行こうと思う。
一人では、寂しいから、女と一緒に行ってもいいかい？」

「え？イヤよ・・
女の人がいるの？」

「いないけど、これから探すのさ。」

「だって、車を取りに行くときは、こっちに寄ってくれるって言ってじゃない。
それに・・　そんなお金あるの？」

「俺に、おごらせて下さいと言う女は、いくらでもいるんだ！」

言ってることが、支離滅裂だった・・

「でも、どうしてわざわざ、私に聞くの？
最初に別れようって言ったのは、ｋｅｉでしょ・・
もう、関係ないんでしょ・」

「ｓｕｎｎｙが、どう答えるかなと思って・・」

もう、ダメだ・・
ｋｅｉは、頭がおかしくなってる。
ｓｕｎｎｙまで、頭がおかしくなりそうだった。
電話を切った直後、メールが来た。

【お前の薬でラリってる声・・　好きじゃない】

勿論、ラリってなんかいなかった。
何がいいたいのだろう・・
ｓｕｎｎｙは、どうしたらいいんだろう・・

ｋｅｉの車の助手席には、『ｓｕｎｎｙ専用』のシールが貼ってある。
他人になんか、座らせたくない・・
そう思うと、涙が溢れた。

第7章（3）ネット依存症

ｋｅｉとｓｕｎｎｙは、電話や携帯でメールをしなくなっていた・・
パソコンに届くメールのみになっていた。
ｋｅｉのブログは、更新されることもなくなっていた。
ｓｕｎｎｙは、ネットでｋｅｉを探し回っていた・・

ある日、こんなメールをもらった。

【ｓｕｎｎｙへ

以前わたしも、寂しさや心の拠りどころを
ＰＣの中に求めていた
心が病んでいると現実社会での友人は遠のき
一人の時間が多くなり、チャットやブログなどに
何かを求めてしまう

無駄に時間だけが過ぎてゆく

わたしは地に足をつけて歩かなければ
そう思った

ｓｕｎｎｙとわたしとは
どこに共通点が存在するのか分からないけど
なんらかの心の病をもっていることは確かなようだ

休日などは何をして良いのか分からなくなる
ＰＣが友人のようになって

社会生活（近隣との付き合いや友人との触れ合いなど）を
遠ざけるようになり、出口の見えない暗いトンネルを自分で作り出してしまう

そう、仕事さえしていれば生活に苦労することはないさ

くだらないＰＣの世界に埋もれてしまうと
普通の社会との付き合いが億劫になる
それはネット社会のほうが楽だからなのだ
面倒なら電源をＯＦＦにすればいいのだから

でも、実際に生きているのはウィンドウの中ではない
ネットの中に生活エリアを作り出してしまうと
それが普通になりバーチャルなのか現実なのか
見極めできなくなる

人間は恐ろしいほど怠惰な生き物で
いつでも『快楽』を求めている
ネット社会は楽だし心地よいからな

でも、そこに前向きで生産的なものは何もない
ＰＣやってるなら散歩したり運動しているほうがマシ

そんな小さなことに気が付くのに
何年かかっただろうか？

ｓｕｎｎｙも何かをきっかけに気づいてほしい

お節介で言うのではない
わたしたちは、今現在ふしぎな関係なのだろうが

袖するも何かのご縁ではなかろうか
孤独感を伴うだろうけど
次なる人生へ一歩づつ踏み出しなさい

ｋｅｉ　】

涙が出た。
ｓｕｎｎｙは、ネット依存症・・
人気ブログを抱え、自分を見失いかけていた。

そして、その頃の記事は、ｋｅｉのことばかり書いていた・・
素直に、反省した。

第7章（4）焦りと借金

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉのメールをきっかけに、ブログ更新のペースを、落としていった。
身体も悲鳴をあげていたし、やっぱりこのままではいけない・・
何よりも・・　ｋｅｉを、失いたくなかったからだ。

それを知ったｋｅｉから、また電話が、かかってくるようになった。

未だに、就職が決まっていないｋｅｉ・・
焦っているようだった。
毎日のように、ハローワークへ行き、求人誌とにらめっこのようだった。
やっと、やる気が出てきたのだろうか・・
ｓｕｎｎｙは、全身全霊で支えてあげた。
でも、なかなか前途多難のようだった・・

「明日からボノボになり、ホームレス生活をする」

と言い、泣かれる日があったり・・

「俺には、資格が、いくらでもあるんだ。
必ず就職してみせる！」

やる気満々の日もあった・・
ｋｅｉは、苦しんでいるようだった。

そして、いよいよ借金をしなければいけないほど、経済が切羽詰っていた。
金利の高いカードローンで、借りるしかなかった。
ｓｕｎｎｙは、反対したがどうしようもない・・

「母には、頼みたくない。
そして、この家も早く出たい・・」

「これからのことだけど・・
二人で、１人前でいいと思うの・・
この前、東京生活は、向かないって思って帰ってきたけど・・
ｋｅｉとなら、東京で暮らしてあげてもいいと思ってるよ。」

そう言って、カードローンのシュミレーションができるサイトを、教えてあげた。

とある朝、メールが来た。

【 今日は何の日？ 借ｋｉｎｇになる日・・ 】

就職先も決まらないまま・・ ｋｅｉは、多額の借金をしてしまった。

しかし、少しずつ２人の距離が、また縮まりつつあるように思えた。

第8章（1）緊急連絡

１０月になった・・
ｋｅｉは、相変わらず、求職活動をしていた。

【 これから、１０日間・・ ど根性で仕事を探す！ 】

そんなメールが、携帯に届いた。
頑張って欲しかった・・
ｓｕｎｎｙも、一緒になって、企業調査をしてあげていた。

【 もしかしたら、家を出るかもしれない・・
その方向からも、探している。
もし、決まったら勤務先は、東京湾海上・・
そうしたら、もうネットもできないし、郵便も届かなくなることになるだろう。】

大手ゼネコンだった。
ｓｕｎｎｙは、複雑だった・・
でも、どうせ遠距離恋愛・・ 逢いたい時に、すぐに逢えないのは同じである。
このチャンスに、賭けて欲しいと願った。

そして週末の金曜日の朝・・
緊急連絡が入った。

【 書類選考が通った。
車が必要になるから、今日、東北へとりに行ってくる 】

ｓｕｎｎｙは、これがラストチャンスになるような、気がした。

【どうしても、逢いたいの・・
突然だから、会社休めないけど、退社後、なんとか中間地点まで行ってもいい？
長岡までなら、８時半には行けると思う・・
それに、半年も放置した車だから、すぐに動かないでしょ？
なにか、必要なものある？　お昼休みに、揃えておくから・・
】

そう、返信した。

ｓｕｎｎｙの車は、軽自動車だった・・
もう、高速に乗ることもないと思って、買い換えていたのだ。
それに、遠距離を走るつもりもなかったので、ナビもつけていなかった・・
ネットで、長岡ＩＣまでシュミレーションしてみた。
なんとか、行けそうな気がした・・

怖い・・
だけど、それ以上にｋｅｉに逢いたい。
その気持ちだけが、ｓｕｎｎｙの原動力となった・・

【　長岡は、８～９時頃に通過予定だ。　】

そんなメールが来た。

ｓｕｎｎｙは、決心した。
お昼休みにガソリンスタンドで、オイル交換、空気圧、ガソリン満タン・・
全て、調整してもらった。

退社時間になった。
目指すは、長岡ＩＣ！
待ち合わせ時間も、場所も決まっていない。
逢ってくれるかもわからない・・
ｓｕｎｎｙは、高速道路に向かって車を走らせた。

第8章（2）長岡までの道

秋の夕暮れ・・
ｓｕｎｎｙは、高速道路を走っていた。
不安がないと言ったら、ウソになる・・
本当に、長岡まで２５０ｋｍちょっと・・　たどりつけるのだろうか？
高速道路は一方通行・・
もう、Ｕターン・・　引き返す事は、できない。

そんな不安から、ｋｅｉに電話してみた。

「もう、長岡に向かって走ってるよ・・
車はどう？
ちゃんと、動いたの？」

「まだ、悪戦苦闘している。　思った以上に、イカレてたんだ・・
それに、この状態じゃ、高速に乗るのは危険だ。
下道で、長岡に向かう・・
予定時間には、きっと着かないよ。
長岡ＩＣを、降りたらまた連絡をくれ・・
用意しておいて欲しいものが、ある。」

ｋｅｉは、ｓｕｎｎｙと逢ってくれるのだ。
なんとか、希望が持てた・・
ｓｕｎｎｙは、ハンドルを、強く握り締めた。
５０ｋｍ、１００ｋｍ、１５０ｋｍ、２００ｋｍ・・
たくさんの、トンネルを抜けて、高速道路を走り続けた。

その運転中に、感じたこと・・

『どんなに長くても、決して、抜けないトンネルはない！』

ｓｕｎｎｙ自身の人生、ずっとトンネルの中を、彷徨っていると思ってた。

出口のないトンネルなどは、ないのだ・・

前を向いて進んでいれば、出口は見えてくる。

そして、必ず抜けられるということ、身を持って知ることができた。

いよいよ、長岡ＪＣＴ・・

ｓｕｎｎｙの車は、北陸道から、関越道に入った。

あと、もう少し・・

ハンドルを握る手が、汗ばんでいた。

第8章（3）不安

ｓｕｎｎｙは、長岡ＩＣで降りた。
いったい、どこで、待っていればいいのだろう・・
そうだ・・　ｋｅｉは、バイパスを下って走ってくるはずだ。
８号線下り車線、目立つところで待とうと思った・・

ｓｕｎｎｙは、高速料金を支払う時に、聞いてみた・・
「８号線へは、どう出ればいいですか？
　近くに、駐車場のあるコンビニは、ありますか？」
料金を受け取りながら、おじさんが、丁寧に教えてくれた。

言われる通り走り・・　コンビニに車を停めた。
ここなら、目立つだろうな・・
コンビニの隣は、大型電化製品店、反対隣は、ガソリンスタンドだった。

「ふぅ～～～～～～」

ｓｕｎｎｙは、大きなため息をついて、時計を見た。
８時３０分を過ぎたところだった・・
約、３時間半あまり・・　無我夢中で、走り続けてきていた。
それから、ｋｅｉに電話した。
「こっちは、着いたよ・・　今、どのあたりなの？」

「まだまだ、２時間はかかると思う・・　渋滞してるんだ。
用意するものは、懐中電灯・・　○○・・　××・・・」

「わかったよ・・　用意しておくね。　気をつけてきてね。」

そういって、ｓｕｎｎｙの現在地を伝え、電話を切った。
懐中電灯は、隣の電気店で買った。
あとのものは、ｓｕｎｎｙの車のトランクに、たまたまあった・・
コンビニで、コーヒーを購入し・・　少し休んでると、携帯が鳴った。

「その近くに、ガソリンスタンドはあるか？」

「となりが、ガソリンスタンドだよ。」

「じゃ、ガソリンスタンドで待っていてくれ・・
ｓｕｎｎｙも、ガソリン入れておいたらいいからな。
１０時には、着くと思う・・」

ｓｕｎｎｙは、指示通りにし・・　ガソリンスタンドへ移動した。

「深夜に、遠くから来られたんですね。　待ち合わせですか？」

そう聞かれた・・
ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの車種、色、ナンバーを教え、店内で待たせてもらった。

もう着いてもおかしくないのに・・

心配になって、ｋｅｉに電話してみた。

「一体、お前何処にいるんだ！　そこの住所を言え！」

いきなり、怒られた。

ガソリンスタンドの住所を聞き、伝えると、通り過ぎてしまっていたらしい。

ｓｕｎｎｙの、説明不足だったようだ・・

本当に、引き換えしてきてくれるのだろうか？

不安・・

その時だった！

「お客さ～～～～ん！　来ましたよ～～～～！」

見覚えのある・・　懐かしい車が、ガソリンスタンドに入ってくるのが見えた！

第8章（4）再会

ｓｕｎｎｙは、店内から飛び出して、手をふった。
ｋｅｉの車は、ｓｕｎｎｙの車の後ろに、停まった・・
車から降りてくるや否や、

「ｓｕｎｎｙ、　懐中電灯、○○、××！
運転席に乗って、アクセルを踏んでくれ・・」

手を差し出した。
ｓｕｎｎｙは、俊敏に、指示に従った。
ｋｅｉは、ボンネットを開き、何かを調整しているようだった。
やがて、それも終わり・・
ｓｕｎｎｙは、初めて口を開いた。

「ｋｅｉ、逢ってくれてありがとう・・　今夜このまま、東京まで走るの？」

「途中で、止まったてたら・・　帰る気が失せる。　じゃな・・」

「えっ・・」

「その前に、スタンドの中で、タバコでも吸おう・・」

ｓｕｎｎｙは、こっそり、ｋｅｉの車のキーを、自分のポケットに入れた。
二人で、タバコを吸い、車に戻った時・・

「あれ？　キーがない！」

ｋｅｉが慌てて、そこらじゅうを、探し始めた・・
ｓｕｎｎｙは、5分位、それを横で見ていた。
でも、この悪戯に怒ったら、本当にこのまま帰りかねないと思って・・
ポケットから、キーを取り出して・・　舌を出して見せた。
「もう・・　何をするんだ！　助手席に乗りなさい。」
怒られるかと思ったら、ナビを使って、何かを調べているようだった・・
「腹が減った・・　ファミレスでもいこう。　どこにする？」
優しく言ってくれた。

ｋｅｉの車の後を、ｓｕｎｎｙは車でついて行った。
ファミレスまでの、ツーリング・・
２４時間営業の、イタリアン専門店で、二人は軽い食事を摂った。
「あ～あ、帰る気、失せちゃったよ。　どこかで泊まろうか？」
ｋｅｉの言葉で、ｓｕｎｎｙは、笑顔でいっぱいになった。
「うん・・　今から泊まれるところ探そう！」
ナビで、ビジネスホテルを探し・・　電話してみた。
「今から宿泊したいのですが、ツイン一部屋ありますか？

２台分の駐車場は、ありますか？」

１１時半を回っていたが、１件目でヒットした！

長岡駅前だった・・

２台の車は、また仲良くツーリングしながら、ビジネスホテルへと向かった。

第8章（5）長岡の長い夜

ツーリングすること２０分・・
ビジネスホテルの駐車場に、無事着いた。
チェックインは、午前０時を過ぎていた・・

「なんか、飲み物とか買いにいこうか？」

そう言われて、二人は最寄のコンビニへ、歩いていった・・
焼酎、おつまみ、お茶、水などを買って、部屋へ戻ってきた。

「ｓｕｎｎｙ・・　久しぶりだな。」

「ｋｅｉ、少し痩せた？　元気だった？」

ｓｕｎｎｙが、横に座ろうとした・・

「俺たちは、もう別れたんだ・・」

ｋｅｉが、そう言った。
ツインとはいえ、なんで同じ部屋に、泊ってるんだろう・・？
涙が、出そうになった。

「東京での暮らしは、どう？」

ｓｕｎｎｙは、涙を堪えて言った。
それから、ｋｅｉとｓｕｎｎｙは、焼酎を飲みながら、いろんな話をした。

求職活動のこと、家での生活のこと、借金のこと・・
これからのこと・・
そして、突然『推理小説』の話になった。
とある、推理小説家の虜になってるようだった・・
その話が、とても面白くて・・　ｓｕｎｎｙは、興味深く聞いていた。

「それから？」

「それで？」

ｋｅｉは、いいところで、話を切ってくれた。
帰ったら、ｓｕｎｎｙも、すぐに買って読んでみようって思った。

気が付くと、午前３時・・
ｓｕｎｎｙは、さすがに睡魔に襲われてきたので、シャワーを浴びようとした。
よく考えると、突然の事だったので、着替えを何一つ、持ってないことに気付いた。
ｋｅｉに、それを伝えると・・

「俺は、ｓｕｎｎｙと、こんなことになるような、気がしてたんだ・・
だから、用意してきた。」

「ずるい！」

二人は、笑いあった。

ｓｕｎｎｙが、一人で、シャワーしている時だった。
シャワーカーテンが、突然開いた！
思わず、両手で身を隠し、目をつぶって、しゃがみこんだ・・
恐る恐る目を開けると・・　目の前に、雄雄しくなった、ｋｅｉのものがあった。
思わず、飛びついて抱き合った・・
そして、熱いシャワーの下で、初めてのキスをした。

「なんで・・？」

泣きながら、ｓｕｎｎｙはｋｅｉに、しがみついた。
ｋｅｉは、無言だった・・

シャワーを終えて、二人は寝衣をまとい、それぞれのベッドに入った。
ｓｕｎｎｙは、背中を向けていた。
眠れなかった・・
寝酒に、濃い目の焼酎の水割りを飲んで、ベッドに潜った。
少し、眠っていたようだった・・
突然、身体に異変を感じた。
ｋｅｉが、優しく愛撫していたのだ・・

「どうして・・？」

ｓｕｎｎｙは、されるがままになってた。

「一緒に、ここで死のうか・・？」

ｋｅｉが、そう言った。
ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉにまたがり、首を絞めた。
その下から、ｋｅｉも、ｓｕｎｎｙの首を、絞めた・・
二人とも本気だった。
気が、遠くなってきた・・

「ぐふっ・・　最後に聞かせて・・
これまでに、一番愛した、女の名前は？」

「うぅ・・　ｓｕｎｎｙ・・・・」

その瞬間、ｓｕｎｎｙは手を緩めた。

「なんで、やめるんだ！」

ここで、一緒に死ねたら、どんなに幸せだろう。
でもそれは、二人のエゴだ・・
それに、ｓｕｎｎｙは、残された家族の事を、考えたのだ。
二人は、泣いていた・・
それぞれの首には、しっかりと絞めた痣ができていた・・

外は、白みかけていた・・
二人は、抱き合ったまま、少し眠った。

第8章（6）長岡の朝

朝6時・・　ｓｕｎｎｙは、目覚めた。
まだ、2時間ほどしか眠っていなかった・・
横に寝ている、ｋｅｉを起こさないように、そっとベッドから起きた。

喉が渇いていたので、コンビにでも行こうかと思った時・・
ｓｕｎｎｙのイタズラ心が、芽生えた。
ｋｅｉの下着、シャツ、上着、Ｇパン、靴、帽子を、身に着けてみた。
鏡に映った、ｓｕｎｎｙの初めての、男装姿・・
なかなか、似合うじゃない・・
一人で、微笑んだ。
そのまま、その格好で、そっと部屋を出て、コンビにまで歩いていった。
なんだか、ドキドキワクワクした・・
ｋｅｉは、起き抜けに、スープを欲しがるのだ。
スープ、紅茶、コーヒー、下着、靴下を買って、ｋｅｉの寝てる部屋へと帰った。
まだ、寝ているようだった・・
ｓｕｎｎｙは、そっと全てを脱ぎ捨て、またｋｅｉの懐へと入った。

「ん～～、何時だ？」

「7時前よ・・　まだまだ時間は、たくさんあるよ。
でも朝食は、7～10時までだから、それまでに起きなくちゃね・・」

「なぁ、ｓｕｎｎｙ・・　スープが飲みたいんだ。」
さっき、買ってきたばかりの温かいスープを、マグカップに注いで渡した。
「ｓｕｎｎｙは、気が利くな・・　ありがとう。」
スープを飲み終えると、また、眠りについたようだった。
ｓｕｎｎｙは、その間にシャワーをし、化粧をした。
「こっちにおいで・・」
ｋｅｉが、ベッドから呼んだ。
素直に、ベッドに横になった・・
自然に、ごく自然に・・　ひとつになった。
ｓｕｎｎｙは、もうこんな事はないって思っていたから、涙が流れた・・
「愛してるよ・・」
「私も・・」
柔らかく、優しく・・　そして、大切に抱かれた。
ｓｕｎｎｙは、大きな波、小さな波を感じながら、何度も頂点を迎えた・・
ｋｅｉに、こんなに優しく抱かれたのは、初めてかもしれない。
嬉しかった・・
気がつくと、２時間以上も、抱かれ続けてた。
もう、９時半を過ぎていた・・

ｋｅｉが果てる前に、食事の終了時間が迫っていたので、そこで止めた。

「シャワーして、食事にいこうか・・」

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの匂いをつけておきたかったので、そのまま洋服を着た。

１０時前に、滑り込みセーフで、食事を摂りにいった。
二人は、おなかいっぱい食べた・・

「ｓｕｎｎｙ、部屋に帰ったら、話がある。」

そう言って、ｋｅｉは席を立った。

第8章（7）長岡の誓い

二人は、部屋へ戻った・・
ｋｅｉは、ベッドに腰かけ、ｓｕｎｎｙは、真正面の位置にある椅子に、腰かけた。

「話って・・なに？」
ｋｅｉは、ゆっくりと話し始めた。

「昨日は、長岡まで来てくれて、本当に助かった・・　ありがとな。
ｓｕｎｎｙに逢えて、本当に嬉しかった・・
このところ、いろいろと、辛い思いをさせてきた・・　ゴメンナ。

そして、思ったんだ・・
やっぱり、メールや電話じゃ、伝わらない事が、いっぱいある。
こうやって、逢って・・
目と目を見て、肌を感じて、初めて解る事が、あるんだ。
ｓｕｎｎｙ・・　俺には、やっぱり、ｓｕｎｎｙが必要だ。

まず俺は、就職しないと、ならない・・
借金もあるし、生活の建て直しもしていかないと、ならない。
１年や、２年では無理だろう・・
ｓｕｎｎｙだって、ご家族で決めた、離婚成立日まで１年半ある。

それまでの間、こうやって・・
月に１度・・　いや、なるべく時間を作って、中間地点でいいから、逢おう。

そして、お互いに励まし合って、いい関係を続けていかないか・・
俺は、ｓｕｎｎｙと一緒になりたい。」

途中から、ｓｕｎｎｙは、涙を流して嗚咽していた。

「あのね・・　実は、長岡まで来たのは、最後のつもりだったの・・
ｋｅｉの顔、ｋｅｉの車・・　最後の見納め。
そして毎日、肌身離さずつけてた、この時計、そしてこの指輪・・
返そうって思って、ここまで来たの。

今の話、信じていいの？
誓ってくれるの？」

ｋｅｉは、答える代わりに、長いキスをしてくれた・・

ｓｕｎｎｙは、しばらく逢えなくても、きっと大丈夫だと思った。
ｋｅｉを、もう一度、信じてみる。

二人の仲は永遠だと・・
ここまで、来てよかった・・

そう思った。

第8章（8）長岡での別れ

電話が鳴った・・

「フロントですが、チェックアウトのお時間なんですが・・」

時計を見ると、チェックアウトの時間が、１５分も過ぎていた。

二人は、慌てて用意をし、フロントへ行った。

「車なんですが、１台だけ、夕方まで預かっていただけますか？」

ｋｅｉが、そう言った。

了承を得て、ｓｕｎｎｙの車を駐車場に残し、二人は出発した。

「今日は、連れていってあげたいところが、あるんだ・・」

ｋｅｉの車は、迷いに迷って・・　目的地に着いた。

『米百俵の精神』の群像がある、『千秋が原ふるさとの森』・・

そこは、河川敷にある、広大な公園だった。

隅から、隅まで・・

二人は、手を繋いで散歩した・・

巨大な、オブジェがあったり・・　ｓｕｎｎｙは、はしゃいだ。

そんなｓｕｎｎｙを、ｋｅｉはカメラに納めてた・・

楽しい時間は、あっという間に過ぎていった。

「ｓｕｎｎｙ、もう一泊・・　一緒にいてくれないか？」

ｋｅｉは、そうせがんできた。

「うん・・　一緒にいたいけど、着替えもないし・・
突然、出てきちゃったし・・
夜の高速・・　怖かったし・・　今日は、明るいうちに帰りたいの。
それに、明後日、二次試験なんでしょ？
ｋｅｉも、今日中に帰って、明日は、ゆっくりしたほうがいいよ・・」

「どうしても、ダメか？」

ｓｕｎｎｙは、少し、心が揺らいだ。

「うん、また逢おう・・　絶対に。　私、信じてるから・・」

そう言った。

ビジネスホテルの駐車場までの帰り道・・
ｋｅｉが、１枚の写真を見せてくれた。

「自殺した、息子・・　小学校５年くらいの時の写真かな。」

ｓｕｎｎｙは、なんだか愛しくて・・　ずっと、膝の上において撫ぜてた。

駐車場に着いた。
ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの車から降りた・・

「長岡ＩＣまで、連れてって・・」

また、ツーリングが始まった。
ｓｕｎｎｙの車が、信号などで、離れないように・・
ｋｅｉは、細心の注意をして、前を走ってくれた。

途中、コンビニへ寄った・・
飲物、タバコなどを買い、それが、最後の別れとなった。
ｋｅｉが、自分のタバコ一箱とライターを、差し出して言った。

「ｓｕｎｎｙの車の中に、次、逢うときまで・・キープしておいてくれないか？」

「うん・・　わかったよ。　代わりに、このＣＤあげる。
私が、編集したものだよ・・　１０番目から聞いてね・・」

二人の想い出の曲・・　『ＴＳＵＮＡＭＩ』だった。
コンビニの駐車場で、二人は最期のキスをした。
涙は、出なかった・・

「またな・・」

「うん、またね！」

２台の車は、長岡ＩＣまで、仲良くまた連なって走った。

長岡ＩＣへ入ると・・

ｋｅｉの車は、関越道へ・・・
ｓｕｎｎｙの車は、北陸道へ・・・
反対方向へと、別れていった。

第9章（1）ことだま

長岡で誓い合った、ｋｅｉとｓｕｎｎｙ・・
そして、反対方向へと別れた二人・・
でも、気持ちは、同じ方向を歩き始めた二人・・

その夜、お互いに、自宅に戻ったことを、メールで確認し合った。

翌朝のことだった。
ｓｕｎｎｙがＰＣを開くと、ｋｅｉから、メールが届いていた・・

【　ことだま

『居場所』

人の居場所とは

人間は初めから居場所なんて用意されていない

居場所は自分で探し、掴み取るもの

ｓｕｎｎｙも新しい居場所探してね

僕も居場所これからだけど作り出す

こんな言葉、あのとき

息子に言ってあげられたら、、、、、

】

そのメールと共に、『鳥かごに住む人』というタイトルで、写真が添付されていた。
長岡で、巨大な鳥かごに入って、空を見上げる、後ろ姿のｓｕｎｎｙだった・・
いつの間に、こんな写真を撮っていたのだろう・・

それにしても、すごく芸術的な写真だった。
それに・・　素敵な　『ことだま』・・

ｓｕｎｎｙは、嬉しかった。
改めて、ｋｅｉを愛してると思った。
ｋｅｉに、愛されてると思った。

今の二人は、こんなに必要とし、愛しあってるんだと・・

『長岡の誓い』・・　きっと叶う！
できる・・
この先、どんな苦難が待ち受けていても、二人で乗り越えていける。

そう、信じていた・・

第9章（2）再燃

長岡の朝をきっかけに、二人の心は、またひとつになった。
ｓｕｎｎｙは、『引越し』を考えていた。
もう、かごの鳥は嫌・・
自分の力で、もう一度生活してみようと、心に決めていた。
働きながらの、アパート探しは大変だったけど・・
気持ちの穏やかな毎日が、続いていた。

ｋｅｉは、求職活動を頑張っていた。
毎日のように、ハローワークに通い、求人誌を読み・・
あらゆる会社に、履歴書を送りまくっていた。

毎日、電話で近況を話し、お互いを励ましあっていた。

「なぁ、　ｓｕｎｎｙ・・　受給中のバイトって、できるって本当？」

「できるよ。　制限はあるけどね・・」

わかりやすいサイトを、メールで添付してあげたり、相談にのってあげてた。

「最近、旧友からの誘いを、ありもしない理由で断ってるんだ・・」

もう本当に、お金に困ってるんだろうな・・
なんとかしてあげたいけど、どうしようもない。

ｓｕｎｎｙが、今できることは・・
こうして、電話してあげて、話を聞いてあげたりするだけ。

「ｓｕｎｎｙ特製の梅干が、また　食べたい・・」

ｋｅｉがそう言ってきたので、梅干を送ってあげた。
一緒に、『仕事守』　『ヒスイの勾玉』　『ビール券』も忍ばせた。

ヒスイは、『自分に自信を持たせ、自己の権威を高める』パワーストーン・・
「仕事運」「成功運」「対人関係」「勝負運」の意味も含んでいる。
また不死鳥のように甦って、元のｋｅｉの輝きを取り戻して欲しいとだけ、願って・・

ｓｕｎｎｙ自身は、アパートが、ほぼ決まりかけていた。
１ＤＫの広めのアパート・・
駐車場もあり、仮契約を交わしていた。
１１月に契約し、１１月中には引越し・・
１２月には、新たなる生活を始めようとしていた。

そんな時だった。
大変な出来事が、ｓｕｎｎｙに、襲いかかった。

第9章（3）交通事故

１０月も終わろうとしていた、ある週末・・
その日は、ちょっと忙しくて、ｓｕｎｎｙは残業していた。
スーツのポケットに入れてあった、携帯電話が鳴った。

「ｓｕｎｎｙ、　仕事は終わったかい？」

「ん～、　もう少しかな？　終わったら、かけ直すから・・」

そう言って、一度、電話を切った。
その後、仕事を切り上げて、退社した・・
車に乗り、携帯にマイクをセットし、ｋｅｉに電話した。

「お待ちどうさま・・　終ったよ。
今、何処にいるの？」

「首都高だよ・・　新宿からの帰り。
めちゃめちゃ　渋滞してるよ・・」

「そうなんだ・・
今週は、ちょっと疲れちゃったから、マッサージにでも　いこうかな～？」

ｓｕｎｎｙは、真っ直ぐ帰ろうか、どうしようか迷っていた。

「え・・　そうなの？　でも、帰宅したら　メッセンジャーで話したいな・・」

ｋｅｉがそう言ったので、マッサージへは　行かないことにした。
二人とも、そのまま電話で話していた・・

いつも走る通勤道路・・
とある交差点で、信号待ちしているところだった。
ｋｅｉと楽しく、会話中だった・・

『ドカ～～～～～ン！！！！！』

爆音がした。

「なんだ？今の音は・・　ｓｕｎｎｙ、何かあったのか？」

ｋｅｉが、そう言った。
ｓｕｎｎｙは、自分の身の上に、何が起こったのか、わからなかった・・
え・・？
もしかして、追突された？

「ｋｅｉ・・　オカマほられたみたい。　一度、電話切るね。」

「わかった・・　身体は大丈夫か？　逃げられるなよ・・
また、あとで連絡してくれ！」

「うん・・　じゃ、ね。」

電話を切って、車から降りてみると・・
信じられない状況が、そこにあった。

第9章（4）心配

ｓｕｎｎｙは、追突事故に遭った。
学生の運転するＲＶ車が、ｓｕｎｎｙの軽自動車に、めり込んでいた。
すぐに警察を呼び、その時は『物損事故』だと、思われた・・
ｓｕｎｎｙの車は、後部がめちゃくちゃだった。
でも、身体は大丈夫だと・・　その時は思われた・・

警察の事情徴収を終えて、保険屋さん、自動車会社、配偶者に連絡した。
そこまでは、冷静だった。
そして、ｋｅｉに電話した・・

「１００：０の、追突事故だったよ・・
心配かけちゃって、ごめんね。　怖かった・・」

ｓｕｎｎｙは、泣き出してしまった。

「身体は、大丈夫なのか？　２，３日はちゃんと様子をみるんだぞ。
また、連絡するから・・」

「うん・・　ありがとう。」

あの時、マッサージへ行こうと思っていた、ｓｕｎｎｙ・・
マッサージへさえ、行っていれば、この道を通ってなかったのだ。
そしたら、事故になんか、遭わずに済んだのだ・・
過ぎた時間を、後悔しても仕方なかった。

翌日、ｋｅｉが朝一番に、メールをくれた。

【 おはよ・・ 身体はどう？ 今日は、何してるの？ 】

【 ありがとう・・ 今のところ大丈夫みたい。
今日は、代車が来るから、出掛けないよ・・ 】

その夜からだった・・
急に、頭痛・耳鳴り・吐き気が始まった。
その事を、ｋｅｉに伝えると、

【 大丈夫なのかよ・・ 事故のせいかもよ。明日もダメなら、病院へ行けよ。 】

ｋｅｉは、毎日毎日、心配してくれた、
事故処理のこと・・
加害者との話し合いのこと・・
いろいろと、アドバイスしてくれた。
誰よりも、頼りになった・・
そばにいて欲しかった。

その心配をよそに、ｓｕｎｎｙの身体は、どんどん悪くなった。
精密検査の結果、わかったこと・・

病傷名は・・ 『頚椎椎間板ヘルニア』

そして、神経障害を起こし始めていた。

手足のしびれ、首の痛み、吐き気・・
入院を勧められた。

第9章（5）入院

ｓｕｎｎｙは、入院することになった・・
入院直前まで、ｋｅｉとは、連絡を取り合っていた。

【ちゃんと、大きな病院へ入院するんだぞ・・
不安だろうけど、一人で大丈夫か？
頑張るんだよ・・】

優しいメールに、涙が出た・・
ｓｕｎｎｙは、一人で入院準備をして、総合病院の『脳神経外科』に入院した。
入院先は、ｋｅｉに一応、メールで伝えた・・

病室は、個室・・
ｓｕｎｎｙは、心身症があるので、人付き合いがちょっと苦手なのである。
特に、初対面の方は、目を見て話せない・・
ましてや、同じ病室で過ごすことなんか、考えられない。

入院後、頚椎カラーを装着し、トイレ・洗面・食事以外は、絶対安静・・
来る日も来る日も、小説ばかり読んでいた。
そう・・
ｋｅｉが薦めてくれた、『ミステリー小説家』にハマった。

入院してから、気付いたこと・・
ｋｅｉと、連絡が途絶えてた。
なぜだろう。
入院直前まで、あんなに、心配してくれていたというのに・・
メールも電話も、完全に無視された。
悲しかった・・
それと同時に、ｓｕｎｎｙなりに考えてみた。

もしかしたら、ｓｕｎｎｙの入院中に根性で、求職活動をしてるのかもしれない・・
決まるまでは、一切連絡しないと、自分の中で決めたのかもしれない・・

ｋｅｉは、そういう人だ。
だって、ついこの間、『長岡の誓い』をしたばかりだったし・・
そう、信じたかった・・
信じていた。
ｓｕｎｎｙは、メールは、最低限の近況報告だけにした。
そして、日記をつけ始めた・・
日記に、ｋｅｉの想いを毎日綴ることで、ｓｕｎｎｙは耐えていた。

少しくらい、電話に出たり、メールの返信をしてくれればいいのになって思った。

そして、もしかしたら・・
突然、病室に現れるかもしれない期待をしてた。

もうすぐ、ｋｅｉのお誕生日・・
何事もなかったら、ｓｕｎｎｙは、東京へ行くつもりだった。
あの事故さえなかったら・・
あの時、マッサージに行ってたら・・
悔やまれて、仕方なかった。
夜になると、不安になり、涙を流し・・　『長岡の誓い』を思い出して、乗り切った。

ｓｕｎｎｙは、起き上がれるようになった頃、リハビリがてらマフラーを編み始めた・・
指先の麻痺が進んでいたので、とても時間がかかった。
ひと針、ひと針・・　ｋｅｉのために、想いを込めて編んだ・・

そうやって、症状が安定して、退院するまでの１ヶ月を過ごした・・

でも・・
待っても、待っても、ｋｅｉがｓｕｎｎｙの前に、現れることはなかった。

第１０章（１）退院後

退院しても、ｋｅｉとは、連絡が取れなかった。
なぜ・・？
ｓｕｎｎｙは、通院治療しながら、不安になっていた。

ｓｕｎｎｙの　『頚椎椎間板ヘルニア』・・
入院は、何か治療をしてたわけではなく、安静だけのためのものだった。
退院後から、いよいよ、本格的な治療が始まった。
毎日の、牽引治療・・

「痛い・・　痛い・・」

ｓｕｎｎｙは、入院前より、症状が悪くなっていった。
握力は、左６キロ、右１０キロまで落ち込んだ・・
左足が、しびれが酷く、よく、つまづくようになっていた・・
再検査の結果・・　新しい病名がついた。

『脊椎症』

頚椎椎間板ヘルニアの症状が進み、神経障害を起こしていることが、
わかった・・

手術で、４本の頚椎を、広げるしかないと言われた。
とても、大きな手術になるらしい・・
手術しないと、ゆっくり神経障害が、進行してしまう。

あんな交通事故で、こんな事になってしまうなんて・・
ｓｕｎｎｙは、もう、元の身体に、戻れないかもしれない。
不安で、仕方なかった。
そして、通院してる病院に、匙を投げられてしまった・・
ふりだしに戻ってしまった、気分だった。

そして１２月に入り、ｓｕｎｎｙは、仕事復帰していた。
毎日、身体が辛かった・・
痺れと、痛みとの、闘いだった。

こんな時、少しでいいから、ｋｅｉと話したかった・・

そして、ｋｅｉのお誕生日が、迫ってきていた・・

このマフラー・・　編みあがるかな？

不自由な手で、一生懸命に編んだ。
そして、ついに編みあがり、なんとか発送することができた・・

きっと、ｓｕｎｎｙの気持ちが通じると、信じていた。
連絡があるのを、ずっと待っていた・・

第１０章（２）裏切り

ｋｅｉは、誕生日を迎えた。
ｓｕｎｎｙは、デコメールを送った。

【Ｈａｐｐｙ Ｂｉｒｔｈｄａｙ ｔｏ ｋｅｉ！
あなたが、この世に生まれてきてくれた日に感謝してます。
ｓｕｎｎｙ】

着日指定してあった、ｓｕｎｎｙからの ｐｒｅｓｅｎｔ・・
ネットで調べてみると、受け取りがされていた。
それでも、ｋｅｉからは、何一つ連絡はなかった・・

それから、２日後・・ ｋｅｉからメールが入った。

【 わたしには、今、真剣に結婚を考えている人がいます。
既婚者のあなたからの、連絡は、今後困ります。 】

信じられなかった・・
その後、電話がかかってきた。

「そういうことなんだ。
これから、俺は、辛い１２月を迎えるんだ。
俺は、独身・・ 自由の身だ。 そして、お前は既婚者だ。
この関係は、やっぱり、よくない・・
終わりにしなければいけないんだ。」

ｓｕｎｎｙは、何も言えなかった。
ただただ、信じられなくて、泣くばかりだった・・

「これからは、ネットの知り合いでいよう。」

そう言われて、電話が切れた・・

あの、『長岡の誓い』は、なんだったの？
ｓｕｎｎｙが事故に遭って、ｋｅｉの辛い時に、そばにいてあげられないのが、原因なの？
信じられなかった・・

ｓｕｎｎｙは、一晩中泣いた・・
泣いても、泣いても、涙は止まらなかった。
翌日も翌々日も、会社を休み、泣いていた・・

ｋｅｉは、独身・・　自由なのだ。
それに比べ、ｓｕｎｎｙは、まだ既婚者。

大量の薬をアルコールで飲んだ・・
死んでしまいたかった。
でも、目覚めた・・

事故を恨んだ。
諦めるしかなかった・・
忘れよう・・

そして、指輪を外し、ｋｅｉに郵送した。

第１０章（３）マフラー

ｓｕｎｎｙは、何も信じられなくなっていた。
全てが、もうどうでもいいと、思ってた・・
『脊椎症』を　受け入れ手術してくれる病院も、見つからなかった。

２日も会社を休んでしまったが、元の生活に戻そうと、歯を食いしばって出社した。
ｓｕｎｎｙは、食べられなくなり、体重が激減していった・・
毎日が、地獄のようで、辛かった。

やっと週末になった。
突然、ｋｅｉから、携帯にメールが入った。

【　ｓｕｎｎｙにもらったマフラー、使ってもいいかな？　】

え・・　今さら何？と思ったが、返信した。

【　使って・・　話したいの。　電話してもいい？　】

【　いいよ　】

ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉの携帯に電話してみた。
着信拒否のメッセージが流れて、繋がらなかった・・
家電に、電話してみた。

「はい・・」

ｋｅｉが、出た。

「ごめん・・　この前、酔った時に、着信拒否にしてしまったらしい。
今日は、男友達とドライブに行くんだ。
今日中に、着信拒否を直しておくから・・」

「うん・・」

「あのな、彼女とは、見合いなんだ。
まだ、付き合って１ヶ月にもならない・・
親密な関係でもないけど、真剣に考えてるんだ。
この前、ｓｕｎｎｙの話をしたんだ。
そしたら、その女と切れないんだったら、アタシが電話してやろうか？って言われた。」

「真剣ならこそ、どうして、自分に不利な事を言ったの？
ｋｅｉは、馬鹿じゃないの？
それに、そんな電話もらっても、私は、何も言い返せないよ・・
わかってるくせに。」

「ｓｕｎｎｙ、俺は、嫌いになったんじゃないんだ。　まだ、ｓｕｎｎｙが好きなんだ。
でも、この関係には、未来はないって思ったんだ・・
俺は、今まで、ｓｕｎｎｙに感謝してもしきれない位、よくしてもらった。
メンタル面でも、経済面でも・・　全てにおいて。
これからも、ｓｕｎｎｙの事は、一生忘れない・・
これ以上の女は、もういないと思ってる。

俺には、悪いところが、１００個以上・・　いや、いっぱいあったと思う。
今、１０個でいいから、言ってくれないか？」
「嫌よ・・　別れた男の悪いところなんか、言いたくないよ。」
「これからも、ｓｕｎｎｙと友達でいたい・・」
今さら、そんな事を言われても、困るだけだった。
「指輪・・　届いたでしょ？
あれは、元々ペアだったもの・・
私達は、別れてしまったけど、指輪には、罪はないと思うの・・
だから、送り返した・・
２個一緒に、ｋｅｉが保管して。」
「わかってる。　ちゃんと2個、同じ箱に入れてある。」
「そう・・　ありがと。
お願いがあるんだけど・・　ｓｕｎｎｙね、もう旅行とか、行ける身体じゃないの。
今日、ドライブへ行って、一番印象に残ったもの、写真で送って・・」
「わかったよ。」
その後、ｓｕｎｎｙの身体のことを、聞かれた。
そして、ｋｅｉが今、アルバイトだけど、働いてる事を話してくれた。

「じゃ、気をつけて、楽しんできてね。」

ｓｕｎｎｙは、そう言って、電話を切った。

それから、２時間後・・　写真添付つきのメールが、携帯に届いた。

それは、マフラーを首に巻いたｋｅｉの姿だった。

＊エピローグ＊

因縁尽（いんねんづく）・・

無条件に　ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉを　愛してきたよ
だけど、報われない愛も　あるんだね・・
ｋｅｉは、ｓｕｎｎｙに　何を　教えてくれたんだろう？
伝えたかったんだろう？

＞過ぎた　事

＞失った　　もの

＞二度と戻ってはきません

＞そして、、いまを生きています、生かされています

これが、ｋｅｉからの　最後のメールなんだよ・・
自殺遺族者のｋｅｉ・・
ｓｕｎｎｙは、ｋｅｉのことを　理解してるつもりだったよ
勝手な、思い込みだったのかな・・
最後まで、支えてあげられなかったもん

でもね、それは・・

今を生きている、　生かされている人間にも　当てはまるのかな？
人間関係にも、当てはまるのかな？
あの時、感じてた気持ちは、時が過ぎれば・・
忘れてしまってもいいと、いうことなのかな？
許されると　いうことなのかな・・

単なる　その変に転がってる　不倫とは違う・・
ｓｕｎｎｙ達は　違う・・
真剣に　将来を意識して、今まできたんだよね
くっついたり　離れたりしても・・
距離があっても　どんな障害があっても　乗り越えてきたんだよね

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
あなたと出逢って別れて
今は不幸だけど、

あなたと出逢わなくて
何もなかったら、私
もっと不幸だった
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ｓｕｎｎｙの手術が成功して、元気になれて、離婚が成立して・・
全てが、終わったとき・・
ｋｅｉのこと、まだ、好きな気持ちがあって・・
そして、ｋｅｉが一人なら逢いにいくね
赤い糸・・
『長岡の誓い』信じて

あなたをまつ

あとがき

『愛』

おまえが愛するとき
草も木もおまえの味方だ
だがおまえが愛するとき
誰もおまえを助けない

何ものにも学ばずに
音楽に酔うこともなく
おまえは愛することを覚える
肉ゆえに魂をおのがものにする

目に見えぬもの
成就することのないもの
決して到達できぬもののみに
みちびかれて

おまえが愛するとき
いまはいま終わり
いまがいま始まる
時は恐れと安らぎに充ちる

つつましいここにいて
おまえは無方へ旅する
幻のはての
なつかしい故郷に魅せられて

そこですべての名は溶けあい
ひとつの名になる
その名を呼ぶことでしか
おまえはおまえを見出せない

＊＊＊　谷川俊太郎　＊＊＊

いかがだったでしょうか？
ｓｕｎｎｙの無条件の愛・・
みなさまに　お伝えることができたのか？
いかに、綺麗な表現を使って書くことが難しいか・・
処女作でしたが、私的には満足しています。

みなさまには、最後まで　お読みいただきまして・・
本当に　感謝しております。

そして、執筆にあたって・・
ご協力いただきました、Ｙさん、Ｎさん、Ｏさん、Ｓさんには本当
にお世話になりました。

尚、感想・意見等については・・
私自身の、これからの人間形成に役立ていきたいと思っています。
お気軽にカキコ願います。

最後に・・
この小説が、一人歩きして、たくさんの人に　末永く愛されていき

ますように・・
ありがとうございました。

＊＊ｓｕｎｎｙ＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7682f/

あなたをまつ

2010年10月9日03時03分発行